

# 九頭神遺跡

府営枚方牧野東住宅建替第5期工事に伴う調査

大阪府教育委員会

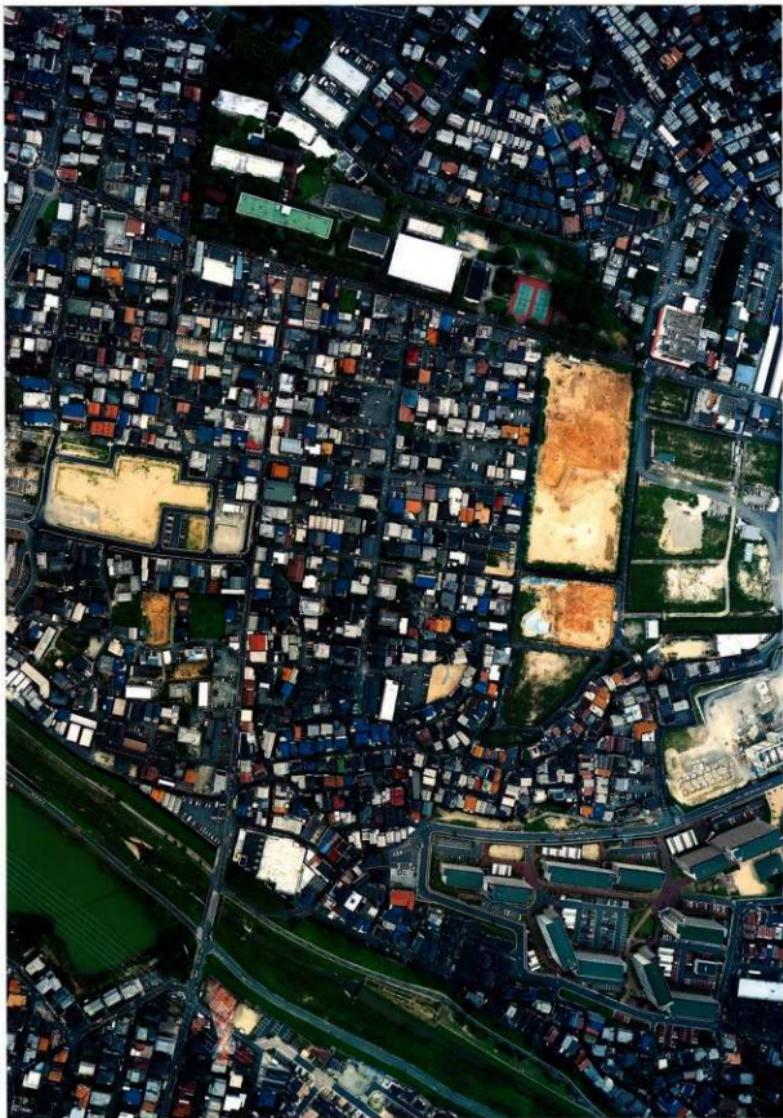


# 九頭神遺跡

府営枚方牧野東住宅建替第5期工事に伴う調査

大阪府教育委員会

巻頭図版 1 九頭神遺跡



調査地周辺の遠景（垂直・北が上方）

調査地は右中央・九頭神廃寺は左中央・下方を流れるのは穂谷川

巻頭図版2 調査地周辺

穂谷川と牧野車塚古墳を望む（北から）



穂谷川と男山丘陵を望む（南から）





第一調査区全景（南から）



第二調査区全景（南から）

## はじめに

大阪府枚方市は大阪府の北東部、京都府との府境に位置します。市域の西限には淀川が流れ、東南に生駒山系を望み、生駒山地からのびる丘陵から淀川左岸の沖積地まで、さまざまな変化に富んだ複雑な地形を呈しています。また、淀川の水運を利用して古くから交通の要地として栄え、文化的にも開けた長い歴史をもつ町です。

一方で、大阪市の中心部まで1時間以内の通勤圏内にあり、住宅地としての開発もすすみ、急速な変化を遂げてきました。今回の調査も老朽化した府営住宅の建て替えにともない、平成10年度から継続しておこなわれてきた一連の発掘調査の最終工区にあたります。これまでの調査の結果から、弥生時代前期から中世の重要な遺跡であることを確認できました。今回の調査においても、弥生時代中期の方形周溝墓がみつかりました。

今回の調査成果は、地域の皆様のより豊かで質の高い文化環境を積極的に創出するための一助として役立てていただけるものと信じております。

調査の実施にあたっては、枚方市教育委員会、住宅まちづくり部、大阪府住宅供給公社、財団法人枚方市文化財研究調査会、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々にご協力いただきました。深く感謝するとともに、今後ともこの地における文化財保護行政にご理解、ご協力ををお願いする次第であります。

平成22年 3月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 野口 雅昭

## 例言

1. 本書は、大阪府教育委員会事務局文化財保護課が、大阪府住宅まちづくり部の依頼を受け平成19年度事業として担当・実施した、府営枚方牧野東住宅建て替え第5期工事に伴う、枚方市東牧野町所在、九頭神遺跡の発掘調査の報告である。調査番号は07009である。
2. 調査は、文化財保護課 調査第一グループ技師 小川裕見子が担当し、遺物整理は、調査管理グループ主査 三宅正浩、副主査 藤田道子が担当した。
3. 調査に要した経費は、大阪府住宅まちづくり部が負担した。
4. 調査の実施にあたっては、大阪府住宅まちづくり部、大阪府住宅供給公社、枚方市教育委員会、財団法人枚方市文化財研究調査会、地元自治会をはじめとする諸機関、諸氏の協力を得た。
5. 本書の編集は、小川が担当し、執筆は調査担当者及び参加者等が分担した。文責は各々文末に記した。
6. 本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社 阿南写真工房に委託した。また、航空写真測量については和歌山航測株式会社に委託した。
7. 本調査において採集した土壤サンプルの観察については小倉徹也氏（財団法人 大阪市文化財協会）にご教示をいただいた。土壤サンプルの花粉・珪藻分析は、株式会社 パレオ・ラボに委託した。
8. 本報告書は、300部を作成し、一部あたりの単価は662円である。

## 目次

第1章 調査に至る経緯 .....	1
第2章 九頭神遺跡の立地と環境 .....	5
第1節 地理的環境 .....	5
第2節 歴史的環境 .....	6
第3節 九頭神遺跡の既往の調査 .....	16
第3章 調査の手順と概要 .....	19
第4章 基本層序 .....	21
第1節 枚方市域の地質 .....	21
第2節 基本層序 .....	22
第5章 調査成果 .....	32
第1節 上層の遺構 .....	32
第2節 下層の遺構 .....	36
第3節 弥生時代の方形周溝墓 .....	39
第6章 出土遺物 .....	43
第1節 出土土器について .....	43
第2節 出土瓦について .....	47
第7章 まとめ .....	49
付論 九頭神遺跡土壤サンプルの花粉・珪藻分析について .....	53

写真図版

報告書抄録

## 挿図・表目次

図 1	府営枚方牧野東住宅建替第5期工事調査対象範囲と既往調査区	1
図 2	枚方市周辺の地形模式図	5
図 3	調査地周辺の遺跡分布図	6
図 4	第I調査区 北・南壁断面図	23・24
図 5	第I調査区 東壁・第II調査区 西壁断面図	25・26
図 6	第II調査区 北・南壁断面図	27・28
図 7	第II調査区 確認トレンチ断面図	29・30
図 8	第II調査区 第1遺構面 SD II-04断面図	32
図 9	第I調査区北端 第2遺構面平面図	33
図 10	第I・II調査区北端 第1遺構面平面図	33
図 11	第2遺構面 SD06断面図	34
図 12	第2遺構面 柱穴断面図	34
図 13	第I調査区 第2遺構面鋤溝群平面図	35
図 14	第II調査区 第2遺構面鋤溝群平面図	35
図 15	第I調査区 U塗溝 SD07断面図	36
図 16	第I・II調査区 第3遺構面平面図	37・38
図 17	第I調査区 方形周溝墓1 SD05断面図	39
図 18	第I調査区 方形周溝墓1・3測量図	40
図 19	第I調査区 方形周溝墓3 周溝断面図	40
図 20	第I調査区 方形周溝墓1 周溝内土器出土状況図	41
図 21	出土土器 弥生時代	43
図 22	出土土器 古代	44
図 23	出土土器 中世	45
図 24	出土瓦	47
図 25	調査地周辺地形復原図	50
表 1	出土土器観察表	46
表 2	出土瓦観察表	48
表 3	産出花粉化石一覧	54

## 第1章 調査に至る経緯

本調査は府営枚方牧野東住宅第5期建て替え工事に伴うもので、平成19年7月から平成20年2月まで、約3,500m<sup>2</sup>の範囲にわたって埋蔵文化財の発掘調査をおこなった。

昭和40年代をピークに供給された府営住宅の多くは、建物の老朽化がすみ建て替え工事を要する状態にある。建て替え工事は、平成18～27年度を計画期間とする大阪府住宅まちづくりマスターplan（平成18年3月改定）の一環として現在も推進される（註1）。牧野東住宅においても、土地の有効利用、居住水準の向上及び住環境の改善をはかる目的で、老朽化した木造住宅が耐火・耐震構造の高層共同住宅に建て替えられる運びとなった。牧野東住宅の敷地は約88,000m<sup>2</sup>に及び、本地区の工事は平成9年度より当初4期にわたって（途中5期にわたる工事に変更）計画され、本調査の後に着手される第5期工事をもって完了する予定である。当初第4期工事範囲とされていた、本調査区から道路を挟んで北東に位置する地区は、旧木造住宅が撤去された後に現況では未利用地となっており、住棟を建設する予定はない。

当該地は、周知の遺跡である招提中町遺跡及び九頭神遺跡の範囲内にあったため、平成7年度から本府教育委員会事務局文化財保護課は、建築部住宅建設課（当時）と建て替え工事に先立つ発掘調査の実施について協議をおこなってきた。当時は周辺の既往の調査例が少なかったため、本格的な全面調査に先行し、まずは建て替え工事予定地内における遺構・遺物の有無及び発掘調査設計のための遺構深度の確認を目的として、平成8年3月、文化財保護課 調査第



図1 府営枚方牧野東住宅建替第5期工事調査対象範囲と既往調査区

2係主査 松村隆文（現・故人）を担当として試掘調査をおこなった。一辺2mの試掘坑を6ヶ所設定し、弥生時代中期～中世にかけての遺構・遺物を発見した。この調査成果を踏まえて協議を重ねた結果、遺構面到達までの掘削深度が極めて浅いこと、住棟建物の基礎のみでなく敷地内に設置される管路・付帯施設、及び施工中の重機による踏み荒らしの可能性等を考慮して第1期建て替え工事予定地内約15,000m<sup>2</sup>の全面発掘調査が必要であると判断した。平成10年度4月に建築都市部長から教育委員会教育長にあてられた埋蔵文化財調査の実施についての依頼をうけ、同課 調査第2係技師 山上弘（現・同課 調査管理グループ主査）を担当として平成10年8月に着手し、平成12年3月に終了した（以下、第1次調査とする）（註2）。

第1次調査終了後、第2期の建て替え工事が計画されるに伴い、遺跡の広がりを確認する目的として平成13年度、同課 調査第2グループ主査 小林義孝（現・調査第1グループ主査）を担当として再度試掘調査をおこなった。この結果、遺跡の広がりは第2期建て替え工事予定地においても範囲全体に及ぶことが確認された。発掘調査に必要な期間、住宅整備のための工事期間等について協議を重ねた結果、住宅建設敷地範囲全体に遺構を破壊しない高さまで盛り土を施し、発掘調査は掘削深度が盛り土の範囲に収まらない、住棟・新設道路・埋管設置部分を対象とすることで合意した。また、続いて平成15年度におこなう第3期建て替え工事予定地内を試掘調査の対象とした（以下、第2次調査とする）。

第2次調査は約8,300m<sup>2</sup>におよび、平成14年4月に建築都市部長からの依頼をうけ、同課 調査第1グループ技師 井西貴子（現・大阪府文化財センター技師）を担当として平成14年6月に着手し、平成16年3月に終了した。

その後、諸調整の不足等から、盛り土を施すにあたって敷地周囲に擁壁の設置が必要となり、平成16年10～11月にかけて擁壁及び管路設置に伴う立会調査を実施した（註3）。

続く第3・4期工事の範囲に関しても、平成17年3月に建築都市部長からの依頼をうけ、平成17年度は同課 調査第1グループ技師 横田明（現・同副主査）、平成18年度は同技師 奥和之（現・大阪府文化財センター技師）を担当者として約11,000m<sup>2</sup>の範囲を調査した（註5）。この調査は、平成17年5月に着手、平成19年2月に終了し、調査報告書は本報告書と併行して作成しており平成21年度中に報告予定である。

今回の調査地を含む第5期建て替え工事範囲内においては、第2次調査時の試掘トレチが5ヶ所（内2ヶ所は北半部、3ヶ所は南半部に）含まれ、一部で遺物包含層の存在を確認していたが、目立った遺構・遺物はなかった。平成18年3月に本府住宅まちづくり部長からの依頼をうけ、平成18年11月20・21日の2日間にわたり、同課 調査第1グループ技師 岩瀬透を担当として再度、確認調査をおこなった。対象地のすぐ西には古代寺院跡として周知の九頭神庵寺があり、府営枚方牧野住宅建て替え事業に伴う道路整備等により財团法人枚方市文化財研究調査会が平成17年度に発掘調査をおこなった。調査が進むにつれて、寺院に伴う極めて重要な遺構・遺物群が顕著に確認されたため、急遽、関係諸機関において協議をおこない、併行

して平成 17・18 年度の 2 ヶ年にわたって国庫補助事業（重要遺跡内容確認調査）として遺跡の内容把握のための調査が実施されるに至った（註 5）。その近接地にあるため、当該地部分においても関連する遺構・遺物の検出が予想された。第 5 期工事対象範囲内に約 20m<sup>2</sup> のトレンチを 2 ケ所設定し、地層の変化、遺構・遺物の有無を確認しながら、上層の現代盛り上部分を機械、その後は人力を用いて掘削した。その結果、対象地の北端部付近に設定した A 1 トレンチにおいて、地表下約 0.4 m 付近で遺物包含層を確認し、その下層上面にあたる地表下約 0.7 m 付近において落ち込みを検出し、瓦器、瓦質土器、土師器、須恵器などが出土した。対象地の南端付近に設定した A 2 トレンチでも同様に、地表下約 0.4 m 付近において包含層を確認し、その下層上面にあたる地表下約 0.7 m 付近においてピットを検出したが、遺物は出土しなかった。

それらの調査成果を踏まえて協議を重ねた結果、平成 19 年 3 月に住宅まちづくり部長からの依頼を受け、第 5 期建て替え工事範囲内のうち、現況の生活道路北側にあたり確認トレンチ A 1 を含む住棟建設予定地約 4,300m<sup>2</sup> を本調査範囲とした。確認トレンチ A 2 を含む工事範囲の南半部はプレイヤットとして整備される計画であり掘削を伴う工事が予定されないため、発掘調査の対象範囲を北半部に限定した。発掘調査範囲は当初、約 4,300m<sup>2</sup> を予定していたが、住宅整備に伴う生活道路の付け替えが予定されており、現況で使用されている生活道路を当初の調査範囲に含んでいた。しかしながら、地元住民の要望をうけた本府住宅まちづくり部 住宅整備課との協議の結果、平成 19 年度の調査予定時に現況道路を封鎖することは難しいと判断したため、当該地部分に関しては工事可能な時期に随時立会調査として対応をおこない、現況道路を除いた約 3,500m<sup>2</sup> の範囲を全面発掘調査する運びとなった（以下、第 4 次調査とする）。

第 4 次調査範囲は九頭神遺跡の東端にあたり、調査範囲の東端に接する道路を境に西側には招提中町遺跡が存在する。第 3 次調査以前の調査範囲はこの招提中町遺跡内に位置することになる。第 1 次調査では、弥生時代から中世にかけての遺構・遺物がみつかり、中でも弥生時代前期から中期にかけての住居址とともに、中期前半の方形周溝墓を 40 基以上も検出したことは特筆に値する（註 6）。第 2 次調査では弥生時代から平安時代にかけての遺構・遺物がみつかった。弥生時代には第 1 次調査で検出した方形周溝墓群の広がりが途絶え、円形竪穴住居と穂谷川に向かって流れる自然流路を検出した。一方で、古墳時代初頭と平安時代の掘立柱建物・住居址は統いて確認した（註 7）。平成 18 年度の調査範囲においても、古墳時代初頭と推定される竪穴住居、平安時代の縦柱建物などを検出し、この 2 つの時代の集落はかなり広範囲にわたることを確認した（註 8）。平成 19 年度には弥生時代の方形周溝墓、古墳時代～近世にかけての谷や耕作の痕跡などの遺構を検出した。本報告書はその平成 19 年度に実施した第 4 次発掘調査成果を記録、報告するものである。

また、第 4 次調査区の北西部から東西に走る生活道路は、前述の調査区西側の府営枚方牧野住宅の建て替え工事用地につながる。その用地も周知の埋蔵文化財包蔵地である九頭神遺跡範囲内にあったことから、平成 8 年 7 月に本府教育委員会文化財保護課によって確認調査を実施した。

そこでみつかった古墳時代から中世にかけての遺構・遺物の存在は当該建て替え工事範囲内の全域に広がると推定できたため、関係諸機関において協議のうえ、本府建築都市部（当時）が財団法人枚方市文化財研究調査会に委託をして発掘調査をおこなった。計画用地を南北に分断する道路を挟んで北側の約900m<sup>2</sup>を平成12年度、南側の約5,030m<sup>2</sup>を平成13年度、道路部分については約200m<sup>2</sup>を建て替え工事と併行して平成15年度に実施し、合計で6,000m<sup>2</sup>を超える広範囲にわたる。その結果、平成12年度調査地の遺構が集中する部分は駐車場として再活用されることが決定されていたため、協議の上、真砂土で埋め戻して現地保存された（註9）。

そしてその後、前述の平成17・18年度の2ヶ年にわたり国庫補助事業、重要遺跡内容確認調査がおこなわれ、残存状況のよい遺構が多く発見された（註10）。大阪府住宅まちづくり部との協議を重ねた結果、牧野住宅は当初の建て替え設計を変更し、用地の一部にあたる約1,270m<sup>2</sup>は史跡公園として整備される運びとなった。枚方市では、この史跡整備にあたり、平成19年度に学識経験者や地元住民などからなる整備検討委員会を設置し、平成20年度には実施設計が行われ、平成21年度より整備工事が着手される予定である（註11）。

また、今回の第4次調査区の北西部は駐車場となり住棟の建設予定がないため、関係諸機関において協議の結果、生活道路と隣接する角部分に簡易な九頭神廐寺及び九頭神遺跡の解説とともに両遺跡の遺構が存在する位置を示す道路標識・案内板を建設する予定である。

（小川 裕見子）

（註1） 大阪府住宅まちづくり部『大阪府住宅まちづくりマスタートーブラン』2007年3月

（註2） 大阪府教育委員会『招提中町遺跡—府営枚方牧野東住宅建て替えに伴う弥生時代墓域の調査』

大阪府埋蔵文化財調査報告2001-1 2002年3月

（註3） 大阪府教育委員会『招提中町遺跡』Ⅱ 大阪府埋蔵文化財調査報告2004-1 2005年3月

（註4） 大阪府教育委員会『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』11 2007年11月

（註5） 財団法人 枚方市文化財研究調査会『九頭神廐寺』—寺院地北西域の調査成果—

枚方市文化財調査報告第54集 2007年

（註6） 大阪府教育委員会 2002年3月 前掲

（註7） 大阪府教育委員会 2005年3月 前掲

（註8） 大阪府教育委員会 2007年11月 前掲。詳細の報告は、大阪府教育委員会『招提中町遺跡』Ⅲ  
(2010年3月刊行予定) を参照されたい。

（註9） 財団法人枚方市文化財研究調査会『九頭神遺跡』Ⅱ—府営枚方牧野東住宅建て替えに伴う九頭神遺跡

第168次発掘調査概要報告書 枚方市文化財調査報告第44集 2004年

（註10） 西田敏秀氏（財団法人枚方市文化財研究調査会）のご教示による。

（註11） 同上

## 第2章 九頭神遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

枚方市は大阪府の北東部に位置する。市域は、北から東にかけては京都府八幡市、京田辺市と接し、南は大阪府寝屋川市、交野市、奈良県生駒市と接する。北西には大阪府高槻市が位置し、淀川がほぼその境界となる。

枚方市の地形は、下位から沖積面、段丘面、丘陵面、山麓面の大きく4つに分けられる。枚方市東南部に聳える生駒山麓からは、北東へ向かって男山丘陵が派生し、反対の南西側では枚方丘陵が北方向へ突出して淀川近くまで迫る。さらに東側には長尾丘陵がのび、丘陵に囲まれた中に標高20～30mの台地地形が展開する。これが交野台地である。

生駒山地に源を発する船橋川、穂谷川、天野川が交野台地上をほぼ北西方向に流れ、淀川に注ぐ。降雨時を除けば、これらの河川の流水量は概して少ない。枯れ川の状況を呈することが多く、天野川下流域以外は河川による沖積平野の形成は未発達である。対岸の三島地域は、淀川へ向かって徐々に標高を減じているが、それに対して交野台地側は、ところによっては崖面を形成するほど淀川近くで急激に標高を減じる。この地形的特徴から、かつての淀川流路は現在よりも交野台地近くを流れていたものと推測される。



図2 枚方市周辺の地形模式図

財団法人枚方市文化財研究調査会 2006年『小倉東遺跡』Ⅱより転載

## 第2節 歴史的環境

枚方市域には多くの遺跡が存在し、丘陵部においては古くは旧石器時代にまで遡ることができるものもある。ここでは本調査地が位置する交野台地周辺の遺跡を中心として、九頭神遺跡の当時の周辺環境をふりかえりたい。

### 旧石器時代

枚方市域に所在する旧石器時代～縄文時代の遺跡について、その存在は確認されているが、全容を把握するに至る遺跡はなく、未だ不明瞭な点が多い。

旧石器時代は、遺構から遊離した遺物の採集によってのみ確認されている事例が多い。旧石器時代の堆積層に相当する洪積層から石器の出土があった遺跡は、穂谷川の北約200mほどの枚方市東部、長尾丘陵の丘陵裾に位置する藤阪宮山遺跡と、枚方台地の北端の淀川沿い、男山丘陵



図3 調査地周辺の遺跡分布図

の西麓に位置する樟葉東遺跡の2例のみである。どちらも調査面積が狭く、遺跡の全容を把握するには至っていない。前者では、サヌカイトとチャート製の石器100点余りが炉跡と考えられる楕円形の焼土とともにみつかった。後者では、国府型ナイフ形石器を含むナイフ形石器、削器、尖頭器、翼状剥片などをはじめ800点余りの石器が出土したが、遺構はみつかっていない。この他には船橋川の北側、低位段丘上の船橋遺跡からも比較的まとまった資料が出土している。

交野台地上では旧石器時代の層位が確認されておらず、石器は後世の遺構や包含層に混じった状態で出土する。穂谷川を挟んで九頭神遺跡の南側に位置する小倉東遺跡からは、サヌカイト製の舟底形石器が採集されている（註1）。その東、交北城ノ山遺跡では、中世の包含層および弥生時代の遺構埋上などからナイフ形石器や削器などが数十点出土したが、遺構及び旧石器文化層の確認には至らなかった。本調査地の東に隣接する招提中町遺跡では第1次調査時に、瀬戸内技法を用いたものを含む横長剥片素材もしくは縦長剥片素材のナイフ形石器が後世の包含層・土坑などから、横長剥片素材の削器が弥生時代中期前葉の方形周溝墓から、計5点が出土した（註2）。

#### 縄文時代

縄文時代の遺跡は穂谷川流域に限定してみられる。枚方市東部の左岸に位置する穂谷遺跡からは、近畿では最古級となる早期の押型文土器片や前期の爪形文土器片などが石匙や石鑿とともに出土した。そこから穂谷川をやや下った津田山麓の縁辺にある津川三ツ池遺跡は旧石器時代～縄文時代前期の遺物散布地として知られる。すべてがサヌカイト製の40点を超える石鑿と3点の石匙、瑪瑙・チャートなどの石くず片が採集されたが、上器は伴わないので、時期などの詳細については不明なままである。

九頭神遺跡の近隣では、前掲の交北城ノ山遺跡がある。この遺跡は旧石器時代から中世にかけての複合遺跡であり、縄文時代では、晚期前半の埋葬遺構とそれにともなう遺物をはじめ、後期から晩期に属する上器類、石鑿・石棒などとともに、この付近では出土例の少ない黒曜石が出土している。そして穂谷川流域の縄文時代遺跡は、概して時期が新しくなるにつれ、その立地高度を下げる傾向にあることも指摘される（註3）。また、交野台地上でも縄文時代のものと考えられる石鑿の出土は数例あるが、いずれも明確な土器を伴わずに単独で出土しており時期を明確に特定できない。招提中町遺跡においては、縄文時代に属すると考えられる2点の土器片が出土したが、詳細を認識できるような残存状況にはなかったようである（註4）。

#### 弥生時代

弥生時代の第I様式新段階～第II様式になって交野台地周辺を中心に集落遺跡が増加する。現状では、第I様式古段階～中段階の遺跡はみられず、弥生集落に関しては、他の多くの地域と比べてやや遅れて出現したと想定せざるをえない。

この地域での弥生時代集落の展開は、招提中町遺跡からはじまるといえる。第I様式新段階から土器とともに土坑・ピット・溝などの遺構が確認され、包含層から出土する上器の量も増加し、この地で生活が営まれはじめたことを示唆する。第1次調査で検出したこれらのピット群の東側

には、墓の可能性がある3基の土坑が主軸を同じくして並び、集落と墓域の一部が合わせて検出された可能性がある。出土遺物は第Ⅰ様式後半～末と推定でき、壺・甕・鉢の3器種の土器に合わせて、石鐵、大型蛤刃石斧の未成品、砥石などが出土した。石器類には、石鐵や石錘、石包丁の未成品、原石や剥片の石器素材等も多数出土しており、ここが単なる集落ではなく、石器生産を営む集落であった可能性が高い。小規模ながらも、拠点集落的な機能を備えていた可能性も指摘される（註5）。この調査成果は、数少ない前期集落の様相をうかがううえで注目される。

招提中町遺跡ではこの後、第Ⅱ様式の段階に入つて集落は着実に発展する。中期前葉においては、竪穴住居とともに30基を超える方形周溝墓がつくられる。穂谷川を挟んで南側の交北城ノ山遺跡でもほぼ同時期の円形竪穴住居群とともに方形周溝墓42基、土坑墓16基以上が検出された。加えて、多数の溝状遺構や井戸状遺構もみつかり、この遺跡は中期前半～後半にかけて大きく発展するようである。両遺跡とも、現在のところ畿内第Ⅱ・Ⅲ様式の土器をともなう遺構が多数みつかっているが、畿内第Ⅳ・Ⅴ様式にあたるものはみつかっておらず、当該時期には一旦集落が廃絶すると考えられている。その一方で、中期後半段階になると、穂谷川を東方に2kmほど遡った長尾丘陵上に集落遺跡が展開はじめる。田口山遺跡と長尾谷町遺跡は、わずか1本の谷地形をはさむだけでほぼ同時期に成立し、同一集落として把握すべきであるといわれる。この廃絶と新たな遺跡の成立については以前から運動が指摘されるところであり、弥生時代中期後半には台地上に形成された比較的大きな集落が前述のように一旦廃絶し、集落は台地上から丘陵上へ移動するという。そして、庄内式に併行する弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、集落は再び台地上にもどってくる。招提中町遺跡や交北城ノ山遺跡もこの例にもれない（註6）。これまでに九頭神遺跡で明確な遺構が確認されているのもこの時期で、九頭神廃寺の下層では弥生時代終末期以降から竪穴住居址や掘立柱址物跡が検出されている。本調査においては、これよりやや遅る弥生時代中期の遺構を確認することができた。

この中期後半における招提中町遺跡、交北城ノ山遺跡の2遺跡の成立を契機として、後期には長尾西遺跡、出屋敷遺跡、ごんぼう山遺跡、御殿山遺跡、藤阪東遺跡など長尾丘陵に遺跡が爆発的に増加する。同じ頃になって、天野川流域でも丘陵上の星丘西遺跡、村野遺跡、藤田山遺跡に中期の竪穴住居群が展開はじめ、星丘西遺跡では中期～後期の方形・円形周溝墓、藤田山遺跡では人が飛び越えられないような規模のV字溝などが住居址とともにみつかった。星丘遺跡、村野南遺跡、森遺跡、鷹塚山遺跡、山之上天堂遺跡、祐子作遺跡などの諸遺跡は後期に入って成立する。鷹塚山遺跡では分銅形土製品、山之上天堂遺跡では平面形が六角形を呈した竪穴住居などが注目される。これらの集落の多くは、長尾西遺跡や出屋敷遺跡の一部などを除いて、古墳時代のはじまりとともに消滅する。

また、近年の調査では、天野川左岸の交野市境に位置する上の山遺跡において、縄文時代晚期から弥生時代前期のものである可能性の高いピットや土坑、第Ⅱ様式の土器をともなう溝や土坑などが検出され、丘陵地における弥生時代前期から中期に遡る集落の存在が十分に想定でき、今

後のさらなる調査が期待される（註7）。

そして、弥生時代終末期から庄内併行期にかけて、枚方地域の遺跡は急増する。周辺では九頭神遺跡を含め、招提中町遺跡、交北城ノ山遺跡など、一度廃絶した台地上の遺跡においても集落が復活する。招提中町遺跡では第1次～3次調査を通して、堅穴住居群が検出された。しかしながら、この後の古墳時代には集落に関係した遺構はさほど広がらず、次に府営枚方牧野東住宅工事予定地において安定的に集落が営まれるのは掘立柱建物が検出される平安時代になる（註8）。

#### 古墳時代

枚方市内の古墳時代は、前期には天野川流域を主体に展開するが、現在も残存するものは少ない。下流域では、鷹塚山遺跡の楕円形マウンドをもつ木棺墓、中宮ドンバ墳丘墓群などの墳墓が弥生時代後半～庄内併行期に築造される。古墳時代前期には、前方後円墳であったといわれる万年寺山古墳が、現在の意賀美神社の境内、淀川を望む丘陵突端に築造された。埋葬主体である粘土櫛からは、8面の鏡が出土した。天野川左岸の香里丘陵東端部に立地し、団地建設に先立つ道路工事の際に発見され消滅した藤田山古墳では3基の粘土櫛がみつかり、内1つから画面帯神獸鏡1面、銅鏡、鉄鑿、鉄斧、鐵形石製品などが出土した。

天野川流域の前期古墳では、現状では石室をともなう古墳がみつかっておらず、この点については時期的な問題だけではなく、被葬者である天野川流域を支配していた豪族を特徴づける性質である可能性も指摘される（註9）。大規模な古墳では、禁野車塚古墳において近年改めて再調査がおこなわれ（註10）、従来の所見を覆すような新たな知見が加えられている。天野川右岸には、全長約120mを測る北河内最大級の前方後円墳である禁野車塚古墳が、西にのびる舌状台地の先端に前方部を西に向けて存在する。この古墳については、出土埴輪や立地から4～5世紀代のいずれの時代に築造されたのか確定的ではなかったが、上記の調査成果をうけた再検討によって、4世紀初頭もしくは3世紀代におさまる可能性が高い前期古墳であることがわかった（註11）。その他にも上流域では、交野市域に北河内最古とされる森古墳群、さらに高所に築造された鍋塚古墳などが展開する。

一方で同じ頃の穂谷川流域の様相は、さほど明らかでない。しかしながら、やや遅れて穂谷川を挟んで九頭神遺跡の対岸、河岸段丘北縁に前方部を東に向けて牧野車塚古墳が築造される。3本の渡土堤をもつ鍵穴形の周濠をそなえ、全長107mを超えるこの古墳は（註12）、従来は5世紀代の中古墳とされることが多かった（註13）。しかしながら、平成16年度の第2次調査や平成19年度の測量調査の結果、4世紀第2四半期をくだらない前期後半の古墳であることがわかった（註14）。これまで安定的に首長墓が築造されつづけていた天野川流域から穂谷川流域に、造墓活動の展開地が移動する。牧野車塚古墳の南西一帯には、赤塚、権現塚、子供塚、ショーガ塚などの陪冢の可能性もある一連の古墳が知られるが、現在は消滅している。

中期になると、九頭神遺跡よりもやや西の穂谷川右岸に、6世紀代にかけての日置山古墳群や牧野阪古墳が展開する。枚方台地が淀川に向かって西方に突出した傾斜地に築かれた牧野阪古墳

は、直径約15m、高さ約4mの円墳とされる。内部構造や築造年代を確定するような詳細は確認されていないが、頂上に凹みがあることと円筒埴輪片がみつかっていることは確認されている（註15）。船橋川流域では、男山丘陵の西麓に並んで埋葬された箱式石棺と埴輪円筒棺を主体とする樟葉古墳がある。5世紀前半に築造された直径20m程度の円墳と考えられているが、調査後に消滅してしまい現存しない（註16）。

枚方市域の後期古墳は、主体部が明らかでないものも多いが、概して横穴式石室墳は少なく、目立ったところではすでに消滅してしまった白雉塚古墳があげられるのみであろう。直径30m、高さ4mのこの古墳は、淀川と天野川を望む丘陵地に6世紀後半に築造された。花崗岩が積まれた片袖式の横穴式石室は、内部が真っ赤にぬられていたという。須恵器・土師器をはじめ、鐵刀、鐵鎌、馬具類など多数の副葬品が出土した。後期古墳の内部主体としては一般的に普及していた横穴式石室が枚方市域にはほとんど認められないことは、地質的条件から石材の調達が困難な地域であることもあげられる（註17）。

牧野車塚古墳の周辺には木棺直葬を主体とする低墳丘墓群、小倉東古墳群が展開する。その他にも、交野台地上では北縁部に養父・比丘尼塚古墳、宇山古墳群などが築造される。2体合葬の木棺直葬を主体とする直径約14mの円墳、宇山2号墳の周溝内の中坑からは素環鏡板付鉢が出土した。6世紀前半～7世紀代に営まれた小倉東古墳群の一部のものや、銀象嵌釦付大刀が副葬された横穴式木室と木棺直葬が並列する直径約13mの円墳である宇山1号墳などは飛鳥時代初頭、7世紀に入ってからの築造と考えられる（註18）。

古墳時代の集落は、前期では穂谷川流域の台地上には招提中町遺跡、丘陵上では津田トッパナ遺跡、藤阪南遺跡、四口中島遺跡などがあり、竪穴住居等が検出された。藤阪南遺跡の古墳時代前期に属する竪穴住居には火災にあったと見られる住居が1棟みつかった。後期のものでは、倉庫と考えられる2棟の掘立柱建物が直角に並んでみつかった。数箇所の柱穴には柱根も残り、柱の表面に手斧による加工痕が確認できるものもあった。この2棟の建物跡の遺構は、藤阪小学校北側の校庭の下に今も保存されている（註19）。また、弥生時代後期から継続する茄子作遺跡は、古墳時代中期までつづき、多数の韓式上器の出土が注目された。他にも、九頭神遺跡、星丘遺跡、藤田町遺跡などでは後期の掘立柱建物跡がみつかっている。

府営枚方牧野住宅工事予定地の九頭神遺跡においては、古墳時代後期末～飛鳥時代前期にかけての造り付けカマドをもつ竪穴住居や掘立柱建物などの遺構から、集落の存在がうかがえる。

古墳時代後期、6世紀後半以降は、前掲のように交野台地北縁部に古墳などの墓域が展開し、台地中央部から南斜面に集落遺跡が広がる。生活適所である南側斜面が居住空間として利用された可能性とともに、土地利用の変遷を推察する上でモデルとなるような、周辺遺跡間の密接な関連性を示すことが考えられる（註20）。

#### 飛鳥時代～平安時代

飛鳥時代前半に下る可能性のある古墳は前項で上げたが、そのうち小倉東遺跡では8世紀後半

と推定される合口甕棺や9世紀後半～10世紀前半の埋甕なども検出され、古墳時代以降も葬地として利用されていたことがわかった（註 21）。同時期の集落は九頭神遺跡・招提中町遺跡などから竪穴住居址がみつかっている。生産遺跡では、京都府八幡市との市境にまたがる八幡丘陵西麓に位置する楠葉平野山瓦窯跡があり、四天王寺に供給された素弁八葉蓮華紋軒丸瓦を焼いたことで知られる。7世紀初頭から操業されたと考えられるこの窯跡群は8基からなり、瓦陶兼業窯として12世紀まで継続する。枚方市域での須恵器生産は6世紀代から本格的に始まったと考えられ、山田池の南北両岸から藤阪地区にかけて多くの須恵器窯がつくられた（註 22）。近年の調査では藤阪宮山遺跡から、6世紀後半～7世紀、7～8世紀の操業と考えられる2基の登窯がみつかった（註 23）。その他にも飛鳥時代の瓦窯や平安時代の土器生産遺跡を含む楠葉東遺跡、奈良時代末～平安時代前期に男山丘陵西斜面に築かれた楠葉瓦窯などが知られる。周辺では九頭神遺跡のすぐ西北に位置する牧野阪瓦窯が平安時代前期に操業していた。平安京西寺に屋根瓦を供給したことで知られるが、九頭神廃寺にも供給していた。

枚方市域では、飛鳥時代前半の創建に遡る古代寺院は知られていないが、飛鳥時代後半（白鳳期）は、男山丘陵南斜面（現・八幡市域）には西山廃寺、九頭神廃寺、奈良時代に中山觀音寺、百濟寺などが創建された。百濟寺跡は国特別史跡に指定され、現在は創建当時の主要堂塔の遺構が史跡公園として保存・整備されている。百濟王氏一族の氏寺で、東西に塔を並列する薬師寺に類似した伽藍配置をもつが、両塔を囲う回廊が北に位置する金堂にとりつくのが特徴的である。また、白鳳期に遡る瓦も数点出土しており、その地に百濟寺以前にも古代寺院が存在していたといわれる（註 24）。『続日本紀』によると、771（宝亀2）年の光仁天皇をはじめに、光仁天皇1回、桓武天皇13回、嵯峨天皇14回の交野行幸がおこなわれた。百濟王氏の血をひく桓武天皇や、嵯峨天皇の行幸に際しては、この百濟寺を訪れた記録もあるが、これは844（承和11）年の仁明天皇の行幸を最後にとだえる。

九頭神廃寺については、古くから周辺地域において多量の古瓦が出土することが知られ、「金堂」「ドンドン山」などの小字名が残ることや、明治20年代に茶畑から銅造誕生糸迦仏立像（枚方市指定文化財）がみつかったことなどからも寺院の存在が想定されていたが、伽藍配置などの寺域については長らく不明なことが多かった。次項で既往の調査の詳細を述べるように、近年になって塔基壇や門・区画溝・外郭施設など多くの遺構が検出され、その全容が明らかになりつつある（註 25）。

この時期に発展する集落遺跡は、穂谷川流域ではアゼクラ遺跡、田口中山遺跡など、天野川流域では禁野本町遺跡など多数ある。飛鳥時代後半はその南の百濟寺遺跡、奈良時代に入ると禁野本町遺跡において掘立柱建物が展開し、百濟寺を造営した百濟王氏の居住集落であった可能性が古くから指摘される（註 26）。飛鳥時代後半～平安時代にかけての集落遺跡において、大型柱穴の掘立柱建物が検出されたもの多くが古代寺院周辺に位置し、九頭神遺跡・招提中町遺跡と九頭神廃寺、百濟寺遺跡の一部・禁野本町遺跡と百濟寺など、古代寺院とその寺院の造営・維持に

携わった有力氏族の集落に比定される可能性が指摘される（註 27）。

律令制下、本調査地周辺の九頭神遺跡、招提中町遺跡などは当初、茨田郡内に編成されていたが、大宝律令施行時に、河内国の最北端に茨田郡から分割設置された交野郡に属するようになった。『倭名類聚抄』によると、交野郡には三宅・田宮・園田・岡本・山田・葛葉の 6郷、茨田郡には幡多・佐太・三井・池田・茨田・伊香・大窪・高瀬の 8郷が知られる。この交野郡には、片野（埜）神社と久須々美神社という 2 座の式内社があった。現在は、久須々美神社も京阪牧野駅近くの片埜神社に合祀されているが、当初は九頭神廢寺寺域のすぐ西側に鎮座していた。また、平城遷都後には古代官道が整備され、711（和銅 4）年に楠葉駅が新設された。山陽道と南海道は木津川を北進し、八幡・楠葉周辺で方向を変え、山陽道は楠葉もしくは牧野付近で淀川を渡り、南海道は生駒西麓を北河内から南河内へと南下する。都が藤原京から平城京へ移されたことにより、都城との距離が格段に近くなり、人の往来が増すとともに、交通の要所として文化・政治的重要性が増したと考えられる。そして長岡京、平安京へと遷都されるにつき、さらに都城との距離が近くなる（註 28）。

平安時代には、枚方・交野市域の大部分は交野ヶ原とよばれ、貴族の獵遊地として禁野になる。小倉東遺跡の自然科学分析による植生復原では、大阪平野の他地域と比較して照葉樹林が長く残存しており、これはこの地が禁野として植生管理されていたことの裏づけとなる可能性が指摘される（註 29）。禁野化とともに、中期以降になると律令期の郡郷制が解体され荘園が成立する過程で、多くの集落や寺院が廃絶していった。

この時期に、九頭神遺跡では遺構が減少する一方で、東接する招提中町遺跡では遺構が増加し多数の掘立柱建物などが検出される。第 1 次調査区の東にある平野小学校の調査で検出された 10 棟を超える掘立柱建物や大溝、多量の瓦などは概ね平安時代前期に属する（註 30）。その一方で、第 1 次調査でみつかった掘立柱建物群は 9 世紀後半頃を中心とする（註 31）。牧野東住宅の建て替えにともなう招提中町遺跡の調査では、前章でも触れたように第 1 ~ 3 次調査を通して建物跡が検出されている。また招提中町遺跡からは、嵯峨院と共に通する大山崎瓦窯で焼かれた屋瓦が多く出土した。綱仲也氏によると、観察し得た軒瓦のうち 7 割強の資料が大山崎瓦窯で生産されたことが確認された（註 32）。これらの軒瓦とともに、平安京北産と考えられる綠釉陶器や越州窯系の青磁壺片なども出土しており、交野ヶ原遊獵の際に拠点とした行宮など、嵯峨朝の皇室との密接な関連性をもつ施設が存在した可能性が高い（註 33）。また、九頭神遺跡の廃絶と招提中町遺跡の成立は連動しており、山背遷都による南海道の再整備がその背景にあることも指摘される（註 34）。そして、台地上の他地域における集落の大規模な発展は中世にはいるまで待たねばならない。

#### 中世以降

鎌倉時代に入り、交野台地上に廃絶していた集落が再び形成されはじめめる。招提中町遺跡では、第 1 次調査において 13 世紀前半の瓦器焼を伴う掘立柱建物跡 1 棟と土壙墓を、第 2 次調査にお

いても瓦器椀を伴う掘立柱建物 1 棟を検出した。九頭神遺跡では、府営枚方牧野住宅建て替え工事予定地内において、13 世紀後半～14 世紀代を中心とする掘立柱建物 6 棟以上、井戸、大溝、土坑、土塼墓などが確認されている。この時期の掘立柱穴は直径 30cm 程度の円形を呈するものがほとんどで、隅丸方形を呈する飛鳥～奈良時代のものとは明らかに形態が異なる（註 35）。

穂谷川をやや遡る日置山遺跡では、古墳を破壊造成して中世の集落が営まれている。日置郷は、中世には高野街道の往来で賑わうが、南北朝の動乱で戦禍をこうむり灰燼に帰した。穂谷川対岸の交北城ノ山遺跡では、区画溝に開かれた方形の壇状地形を検出し、溝内からは瓦器椀、青磁碗など鎌倉時代の遺物が出土した。壇上からは数時期にわたる柱穴群が検出されたが、時期の特定には至らなかった。しかし、井戸もしくは水溜施設と考えられる遺構から、溝と同様に鎌倉時代の遺物が出土しており、周囲に溝をめぐらした壇状区画に居館的な性格の建物が存在していた可能性が指摘される。他にもここでは、掘立柱建物群、耕作の痕跡を示す遺構、12～13 世紀の木棺墓などが検出され、平安時代以降から中世に至る土地利用と集落構造の変遷を考える上で重要な遺跡であるといえる（註 36）。

また、本調査地の北西、船橋川に望む標高 20 m の台地上には宇山遺跡がある。古墳時代後期～近世にかけての複合遺跡であるが、遺構の削平がはげしく詳細には不明な点が多い。13～14 世紀に属する瓦器・土師質土器・青磁などの遺物は確認されたがこれも 2 次堆積と考えられる。数百点に及ぶかわらけの集積が検出されたが、中には近世以降の陶磁器類も含まれ、近世には当該地も片埜神社境内にあったということから、その関連性が考えられる（註 37）。さらに北側の男山丘陵では、平安時代から続く楠葉東遺跡の黒色土器・瓦器、楠葉野田遺跡の瓦器などの生産遺跡が展開する。

そしてこの中世以降、本調査地周辺では建物の遺構などがほとんど見られなくなる。これは、台地上でも用水の確保ができるようになり、耕作地としての展開が始まったからであろう。本調査区でも鍛溝・畝、井戸など耕作の痕跡を検出している。その後、16 世紀ごろには招提寺内町、枚方寺内町などが生まれ、京都と大阪を結ぶ交通の要所に位置するこの地は重要な位置を占めるようになる。近世には大阪・京都を結ぶ京街道に枚方宿が設置され、宿場町として発展していくのである。  
(小川)

(註 1) 財団法人枚方市文化財研究調査会『小倉東遺跡』Ⅱ—北方鉢町地区土地区画整理事業及び防災公園整備等に伴う小倉東遺跡第 32 次発掘調査概要報告書— 枚方市文化財調査報告第 48 集 2006 年

(註 2) 大阪府教育委員会『招提中町遺跡—府営枚方牧野東住宅建て替えに伴う弥生時代墓域の調査

大阪府埋蔵文化財調査報告 2001-1 2002 年 3 月

(註 3) 財団法人枚方市文化財研究調査会『九頭神遺跡—府営枚方牧野住宅建て替えに伴う九頭神遺跡第 168 次発掘調査概要報告書』Ⅱ 枚方市文化財調査報告第 44 集 2004 年

枚方市教育委員会 1991 年『文化財ハンドブック 枚方の遺跡と文化財』

(註 4) 大阪府教育委員会 2002 年 3 月 前掲

(註 5) 大阪府教育委員会 2002 年 3 月 前掲

- (註6) 大阪府教育委員会「庄内式併行期における招提中町遺跡」『招提中町遺跡』Ⅱ  
大阪府埋蔵文化財調査報告 2004-1 2005年3月 85-92頁
- (註7) 財団法人枚方市文化財研究調査会 2004年 前掲
- (註8) 大阪府教育委員会 2005年3月 前掲
- (註9) 枚方市教育委員会 1991年 前掲 88-92頁
- (註10) 平成18年度には枚方市教育委員会により、禁野車塚古墳の範囲確認調査がおこなわれた(枚方市教育委員会『史跡禁野車塚古墳 平成18年度範囲確認調査概要』枚方市文化財調査報告第52集 2007年)。また、平成20年度には禁野車塚古墳の再調査のため、財団法人枚方市文化財研究調査会をはじめ、関西大学・京都橘大学・京都府立大学の3大学とともに調査団が結成され、測量調査・研究がおこなわれた。詳細は、京都橘大学文学部『京都橘大学 文化財調査報告 2008 牧野車塚古墳・禁野車塚古墳・宮道古墳・大宅庵寺瓦窯跡』2009年、一瀬和夫他「禁野車塚古墳の埴丘測量調査結果」『日本考古学会第75回総会研究発表要旨集』2009年 68-69頁 を参照されたい。
- (註11) 京都橘大学文学部 2009年 前掲「第3章 禁野車塚古墳埴丘測量調査」 9-13頁  
枚方市教育委員会 2007年 前掲
- (註12) 京都橘大学文学部 2009年 前掲「第2章 牧野車塚古墳埴丘補足測量調査」 3-8頁
- (註13) 枚方市教育委員会 1991年 前掲
- (註14) 前掲の禁野車塚古墳同様に、牧野車塚古墳においても、平成16年度に財団法人枚方市文化財研究調査会による第2次調査がおこなわれた(財団法人枚方市文化財研究調査会『史跡牧野車塚古墳 第2次調査』2005年)。そして、平成19・20年度の2カ年にわたって、財団法人枚方市文化財研究調査会をはじめ、関西大学・京都橘大学・京都府立大学の3大学とともに調査団が結成され、測量調査・研究がおこなわれた(京都橘大学文学部『第2章 牧野車塚古墳測量調査』京都橘大学 文化財調査報告 2007 牧野車塚古墳・熊ヶ谷3・4号墳 2008年 4頁、京都橘大学文学部2009年 前掲「第2章 牧野車塚古墳埴丘補足測量調査」3-8頁、一瀬和夫・西田敏秀・菱田哲郎・米田文孝「牧野車塚古墳の埴丘測量調査結果」『日本考古学会第74回総会研究発表資料』2008年)。
- (註15) 枚方市史編纂委員会『枚方市史』第1巻 1967年 337頁
- (註16) 枚方市教育委員会 1991年 前掲
- (註17) 北野耕平氏が指摘する。枚方市史編纂委員会 1967年 前掲 317-326頁
- (註18) 財団法人枚方市文化財研究調査会『小倉東遺跡』Ⅰ・北方鉢町地図土地区画整理事業及び防災公園整備等に伴う小倉東遺跡第32次発掘調査概要報告書枚方市文化財調査報告第48集 2006年
- (註19) 枚方市史編纂委員会『枚方市史』第12巻 1986年
- (註20) 西田敏秀氏が指摘する。財団法人枚方市文化財研究調査会 2004年 前掲 82頁
- (註21) 財団法人枚方市文化財研究調査会 2006年 前掲
- (註22) 枚方市史編纂委員会 1967年 前掲 350頁
- (註23) 財団法人枚方市文化財研究調査会『ひらかた文化財だより』第65号 2005年10月15日
- (註24) 枚方市教育委員会『特別史跡百濟寺跡』平成17年度確認調査概要 枚方市文化財調査報告第51集 2006年
- (註25) 財団法人枚方市文化財研究調査会『九頭神廃寺』-寺院地北西域の調査成果- 枚方市文化財調査報告第54集 2007年  
枚方市史編纂委員会 1986年 前掲

- (註 26) 大阪府教育委員会『禁野本町遺跡』2007年3月
- (註 27) 財団法人枚方市文化財研究調査会 2004年 前掲
- (註 28) 菅田哲郎「考古学にみる古代の交野ヶ原」『歴史シンポジウム 交野ヶ原—その歴史と文学—』  
2008年 発表資料より。
- (註 29) 財団法人枚方市文化財研究調査会 2006年 前掲 「自然科学的調査の成果」 148頁
- (註 30) 枚方市史編纂委員会 1986年 前掲
- (註 31) 大阪府教育委員会 2002年 前掲
- (註 32) 綱 伸也「大山崎瓦窯の操業と交野」『明日をつなぐ道』—高橋美久二先生追悼文集— 2007年
- (註 33) 綱 伸也 2007年 前掲  
菅田哲郎 2008年 前掲
- (註 34) 綱 伸也 2007年 前掲
- (註 35) 財団法人枚方市文化財研究調査会 2004年 前掲
- (註 36) 枚方市史編纂委員会 1986 前掲
- (註 37) 枚方市史編纂委員会 1986 前掲

### 第3節 九頭神遺跡の既往の調査

九頭神遺跡の東南部付近では、古くから古瓦が採集されていることや「ドンドン山」、「金堂」といった字名などから、寺院の存在が予想されていた。明治20年代には「ドンドン山」付近で銅造誕生釈迦仏が発見され、昭和8年には大阪史蹟會によって「ドンドン山」付近は部分的に調査された。そのときに焼けた土壙とともに鉄釘、青銅製品などが出土し寺院の存在が確認された。「河内志」の「久須々美神社」所在を述べた記事に従えば葛上廃寺となり、字名の明治初年の九頭神をあてれば九頭神廃寺となる。この神社は村社として近代まで字九頭神にあったといわれている延喜式内社である。明治42年3月11日に大字阪字一ノ宮の延喜式内社「片埜神社」に合祀され、その後は荒地になったといわれている（註1）。石田茂作、大脇正一、藤澤一夫などによつて出土瓦の研究は進められたが、寺院跡の探求は進展せず、伽藍配置などは全く不明のまま付近は宅地化されていく。

こうした状況の下、昭和58年以降になると個人住宅などの再開発に伴う発掘調査が行われる。九頭神廃寺を含めた九頭神遺跡の究明を目的とした悉皆調査が実施され、長期にわたって断続的に利用される九頭神遺跡の姿が少しづつ解明されつつある。

九頭神遺跡の形成は、弥生時代後期末頃には確實に始まっている。枚方市による第111次調査（註2）では縄文時代中期に比定される土器の出土はあるが、遺構は検出されていない。弥生時代後期末～古墳時代前期初頭にかかる遺構は、竪穴住居、掘立柱建物、土坑などが主に九頭神廃寺の下層で検出されている（第1・37・98次調査）。しかしながら、古墳時代の遺構はその他にはあまり確認されておらず、古墳時代後期末まで空白期となっている。古墳時代後期末以降の遺構としては、第19・53・58次調査などで、遺跡北西部において造付けカマドをもつ竪穴住居や掘立柱建物が検出されている。第84次調査では九頭神廃寺の寺域内でも6世紀末葉の鍛冶関連遺構が検出されており、掘立柱建物を基本とした集落は継続的に営まれていく。

さらに、第58次調査では真北方向へ平行して走る2条の溝が発見されている。間隔が約12mに復原されることから、道路側溝である可能性が高い。道路状遺構は93mに渡って検出され、溝内からは飛鳥IV～平城宮II期に相当する上器群が出土した。同じく真北方向に主軸をとる掘立柱建物群も検出されており、8世紀段階には真北方向を指向する地割を基礎とした集落形成が進行していたことがうかがわれる。また、第19次調査では平安時代初頭に廃絶したと考えられる井戸が検出された。隣接する招提中町遺跡では平安時代前半の掘立柱建物群が存在し、官衙の可能性も指摘されているなど、関係を考えいく上で興味深い。

九頭神廃寺に関しては第25・33・35・56・59次調査において、寺域の東西を画すると考えられる溝や、北限を示す瓦溜りなどが検出され、寺域は約1町半四方であると推定されるに至った。寺域内では、第4次調査で回廊状の掘立柱建物が、第2・37次調査では東西方向に主軸をもつ大型掘立柱建物群などの遺構が検出されたほか、塑像の螺髪などが出土している。さらに第77・98次調査では真北方向に主軸をもつ瓦積の建物基壇が検出されている。一辺約10.5～

11.0m 規模の塔の基壇と思われる。基壇築成に伴う整地土層の存在も確認され、多量に出土した屋根瓦の検討などから、基壇は 7 世紀末～8 世紀初頭に創建されたものと考えられている。また、第 206 次調査では西大門から東方に伸びる寺院地内道路の北側に、築地によって整然と区画された 2 つの付属院地が検出されるとともに、寺院地の北西角が確定された。第 168 次調査では、寺院地及びその周辺で寺院建立以前の集落や大型掘立柱建物群で構成される豪族居館などが検出されており、寺院地とそれを取り巻く地域の具体的な姿が明らかになりつつある。

平安時代中期以降の遺構は検出されておらず、その様相は不明である。しかし第 53・58・168 次調査などでは、鎌倉時代～室町時代に属する掘立柱建物群や木棺墓群が検出されている。木棺墓には瑞花双鳳八稜鏡や青磁碗、瓦器碗などが副葬されており、屋敷墓といわれるものである。また第 111 次調査では、現在の墓地と一部重複する形で室町時代に属する蔵骨器としての土製羽釜などの埋葬遺構が確認されている。

また、本調査と併行して第 206-5・6 次・218 次・225 次調査がおこなわれた。第 206-5 次調査では寺域の西門を構成する大型柱穴 2 基が検出され、西門が掘立柱の四脚門であったことが推定される。また柱の抜き取り穴からは、基壇化粧に用いられたものかどうかはわからないが、凝灰岩片が出土した。206-6 次調査では、倉垣院内の倉庫であると思われる總柱建物 S B 7 や築地の雨落溝などが検出された。218 次調査は前述の延喜式内社「久須々美神社」の跡地にあたるといわれてきた場所で調査が行われた。調査範囲の北端で東西方向の推定幅 2.0～3.5 m、深さ 0.8 m の断面が U 字状の大溝 S D 101 が検出され、大溝からは廃棄された九頭神廢寺の瓦が出土した。この溝は、218 次調査の東側で既に検出されている南北方向の大溝と直交する可能性が高く、重要な施設を区画する溝遺構の一部であるとも考えられる。その他にも、14～15 世紀代に埋められた素掘りの井戸や溝、古代のものと思われる複数の柱穴、弥生時代後期の落ち込みとそこから出土した土器などがみつかった。225 次調査は、本調査範囲のすぐ北側に位置する、関西医科大グラウンド跡地でおこなわれた。サヌカイト石核・石鐵・須恵器・瓦器をはじめとする様々な遺物が出土した。主だった遺構としては、江戸時代～昭和初期にかけての耕作の痕跡がみつかり土地利用の様子が詳細にわかり、本調査範囲で検出した井戸や鍛溝などの耕作の痕跡との関連も考えられる。また、風倒木痕跡も本調査範囲においても北半部を中心に複数検出しており、両調査範囲にまたがって広がるものであろうことが確認できた。

（野島）

（註 1）財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報』29 2007 年度分 2008 年 11 月

（註 2）以下、調査次数の記述があるものはすべて同様に枚方市による調査次数を引用した。

## 参考文献

宇和田和生・桑原武志 1984 「九頭神遺跡」『枚方市文化財年報』V 財団法人枚方市文化財研究調査会

大竹弘之 1986 「九頭神遺跡（第 1・2 次調査）」『枚方市文化財年報』VI 財団法人枚方市文化財研究調査会

財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財年報』29 2008 年 11 月

竹原伸仁編 1997 「九頭神遺跡」—九頭神遺跡— 枚方市教育委員会

- 西田敏秀・菱田哲郎 1987 「九頭神遺跡（第3・4次調査）」『枚方市文化財年報』VII 財団法人枚方市文化財研究調査会
- 西田敏秀 1995 「九頭神遺跡（第58次調査）」『枚方市文化財年報』15 財団法人枚方市文化財研究調査会
- 西田敏秀 1997 「九頭神遺跡（第111次調査）」『枚方市文化財年報』18 財団法人枚方市文化財研究調査会
- 西田敏秀編 2004 『九頭神遺跡』II 財団法人枚方市文化財研究調査会
- 西田敏秀 2007 『九頭神廃寺—寺院地北西域の調査成果一』
- 枚方市史編纂委員会 1967 『枚方市史』第1巻 枚方市
- 山上弘編 2002 『招提中町遺跡』大阪府教育委員会

### 第3章 調査の手順と概要

調査区の設定は、残土置き場を確保するため調査範囲を東西に2分し、約9×13mの東側を第I調査区、約8×12mの西側を第II調査区とした。各々の調査区内には、遺物採集地点の確認等のため、便宜上の地区割りを、東から西に5m毎にA～I、北から南に5m毎に0～6と表して用いた。調査に際して、まず東側第I調査区から先行して約3ヶ月間の調査を行った。統いて約3ヶ月間、残る西側部分、第II調査区の調査を実施した。

側溝は、調査区の排水を兼ね、調査区平面の人力掘削に先行して、調査範囲全体の四周をこうように掘削した。第I調査区は東・北・南の3方向に、第II調査区は北・西・南の3方向に設定した。

調査の過程において、20分の1の縮尺による遺構全体の平面図、出土遺物の残存状況が良好だった場合には出土状況を示す10分の1の縮尺による詳細図など、記録のために遺構の特徴に応じて必要なものを作成した。また、20分の1の縮尺による調査区全体の側溝壁断面図を作成した。

写真撮影は、必要な個々の遺構検出状況及び完掘状況、遺構あぜの断面、遺物の出土状況、調査区の東西南北の側溝断面、調査区の全景等を撮影した。全景写真は、第I・II調査区とともに各々第1・2・3遺構面と3回ずつ、足場の上から撮影した。両調査区共に第3遺構面においては、ヘリコプターを用いた航空写真測量を行った。各々の撮影に先行して3級基準点各1点、4級基準点各2点を作成した上で、世界測地系に準じた国土座標値に基づく5m四方のグリッドを測量の基準に用いた。この座標値は、本報告書において全景の遺構平面図(図16)に記載した。撮影は20分の1の縮尺を用いておこない、100分の1の縮尺による遺構平面図を作成した。

本報告書は上記の調査成果の記録をまとめたものである。

以下に参考資料として調査日誌の概要をまとめる。

- |             |  |
|-------------|--|
| 7月10日～      | 調査範囲の現況測量、第I・II調査区の範囲設定。                           |
| 7月17日～      | 第I調査区の地区割り設定（東西10m毎にA～E、南北10m毎に0～6）。<br>第I調査区機械掘削。 |
| 7月23日       | 第I調査区A-1・A-2区側溝を人力掘削。                              |
| 7月24日～      | 第I調査区北壁断面を分層。<br>第I調査区側溝を人力掘削。                     |
| 7月27日～8月17日 | 第I調査区を人力掘削。<br>第I区の北壁、東壁、南壁の断面図（縮尺は1/20）作成及び上層注記。  |

8月 17 日～8月 27 日

第Ⅰ調査区の人力掘削繼續。

第Ⅰ調査区輪郭及び攢乱範囲の平板測量図（縮尺は 1/50）を作成。

8月 24 日 第Ⅰ区 C-4 地区（ただし攢乱）より軒丸瓦片（図 24-1）出土。

9月 3 日～9月 4 日

第Ⅰ調査区第1 遺構面において検出した遺構（主にピット）を掘削。

9月 5 日～9月 6 日

第Ⅰ区調査区第1 遺構面において検出したピットの遺構断面図を作成。

9月 10 日～9月 13 日

第Ⅰ調査区第2 遺構面の精査を行い、終了後に全景写真を撮影。

9月 17 日

第Ⅰ調査区第3 遺構面の航空写真撮影。

9月 18 日

第Ⅰ調査区第3 遺構面、清 SD05 において土器群を検出。

出土状況実測図（縮尺は 1/10）を作成した後、検出状況写真を撮影。

9月 24 日

第Ⅰ区南側において、9月 14 日検出の SD05 からの続きとなる溝を検出  
東半部で同様の土器群を検出。方形周溝墓であることを確認するに至る。

9月 26 日～

第Ⅰ調査区清 SD05 において検出した土器群下層の土器出土状況図（縮尺は  
1/10）を作成。

24 日に確認した方形周溝墓の東側に、さらに 1 基の方形周溝墓を検出。

10月 3 日

方形周溝墓周辺の平板測量図（縮尺は 1/20）を作成。

10月 9 日～

第Ⅰ調査区埋戻し。

10月 22 日～

第Ⅱ調査区内の地区割設定（東西 10 m 毎に F～I、南北 10 m 毎に 0～6）。  
第Ⅱ調査区機械掘削後、側溝を人力掘削。

10月 31 日

第Ⅱ調査区西壁断面図（縮尺は 1/20）作成及び、写真撮影。

11月 7 日

第Ⅱ調査区西壁断面図追加作成及び、土層注記。

11月 8 日～11月 14 日

第Ⅱ調査区表面の攢乱土層を人力掘削。

11月 15 日～11月 26 日

第Ⅱ調査区南壁側溝掘削及び、南壁断面図（縮尺は 1/20）作成。

12月 10 日～12月 17 日

第Ⅱ調査区第2 遺構面遺構実測図を作成。

1月 10 日

第Ⅱ調査区第3 面遺構面の航空写真撮影。

1月 30 日～2月 4 日

確認トレチ 05、06 の平面図及び、断面図（縮尺はともに 1/20）を作成。

2月 18 日～2月 19 日

調査範囲周辺地形の平板測量図（縮尺は 1/100）を作成。

第Ⅱ調査区埋戻し。

2月 26 日

調査終了。

（山田 昌恵）

## 第4章 基本層序

### 第1節 枚方市域の地質

大阪湾やその付近には新世代の第三紀末から第四紀の中ごろまで海や湖がひろがっており、枚方市域周辺には、大阪湾・河内・山城・大和平野までつづく淡水湖があった。このころに堆積した地層を大阪層群とよぶ。大阪層群は、大阪盆地・奈良盆地・京都盆地・播磨盆地と淡路島に分布する鮮新・更新統である。同層群は、丘陵地と台地・段丘の基部に露出しているにすぎないが、堆積盆地の低地下や海底下に、厚く、広く伏在する。丘陵地では、数百m以上、低地下・海底下では最大1,500～2,000m以上もの厚さになる。また、おもに湖沼成層・河成層からなり、12層の海成粘土層と多数の火山灰層をはさむ。古い地層と新しい地層の2つに分けられ、枚方地域において、古い地層を伊加賀層、新しい地層を香里互層とよぶ。

枚方市域にひろがる地形の大部分は低い丘陵であり、これを枚方丘陵とよぶ。この地域の地質構造は、同丘陵西縁をほぼ南北に走る西落ちの枚方断層と片町線の南東側を北北東に走る西落ちの打上断層によって、その枠組みがつくられている。大阪層群研究グループが大阪層群の命名にあたって、同層群の模式地とした千里山丘陵とは淀川をはさんで向かい合う位置にある枚方丘陵に分布し、一般に東南東にゆるやかに傾斜し、層厚が110m以上で陸水成の砂礫層と7層の海成粘土層の互層であると定義した。その他、寝屋川以北の枚方断層沿いでは、地層は西に30°内外からそれ以上傾斜する。また、生駒断層の延長とみられる打上断層沿いでは、地層は直立し、同断層以東では、地層は東西ないし北東の走向をもち、北ないし北西に傾斜する。この大阪層群の堆積の後、幾度かの氷河期を経て、高位段丘堆積層（新旧長尾礫層）、中位段丘堆積層（枚方層）、低位段丘堆積層が形成されていくのである。

調査区周辺は中位段丘上に位置し、周辺地域の中位段丘堆積層は枚方層とよばれる。これは、枚方市内中宮付近にもっともよく発達し、標高30m内外の平坦な中位段丘面（枚方面）を形成する。枚方層は、模式地とされる枚方市別所山と枚方市宮之阪・星丘をのぞけば、層厚7m以下の砂礫層からなる。本層の風化は高位段丘堆積層である長尾礫層にくらべて弱く、堆積面から2～3mまでがやや赤色土化をうけている過程である。この状態は調査地においても一部確認することができた。

#### 〈参照・引用文献〉

- 西田敏秀 2004 「九頭神遺跡の位置と環境」『九頭神遺跡』II 財団法人枚方市文化財研究調査会  
市原実 1993 『大阪層群』 創元社  
片山長三 1970 『枚方台地の形成とその前後』 枚方市  
高谷好一・市原実 1961 「枚方丘陵の第四紀層—とくに新香里層・枚方層にみられる気候変化について—」  
『地質学雑誌』第67巻 日本地質学会  
枚方市史編纂委員会 1967 『枚方市史』 枚方市  
宮地良典・楠利大・武藏野實・田結庄良昭・井本伸広 2005 『京都西南部地域の地質』 地質調査総合センター

## 第2節 基本層序

府営枚方東牧野住宅に伴う基礎や配管による搅乱によって、全体的に削平・搅乱が著しく、遺構の残存状況は良好とはいえない。そのため、搅乱された層の直下に地山が存在しており、基本層序が確認できる箇所が限られていた。原地形は南西方向に下る傾斜をもち、調査区の250mほど南を流れる穂谷川に向けて谷地形が存在すると考えられる。調査区のなかでも、北側は比較的遺構の残存状況が良好で、主に3面の遺構面を確認することができた。

残存状況が良好な北側部分の基本層序をみると8層に分けることができ、さらに細分可能なものはアルファベットで枝番号をつけた。遺構が存在するのは3～7層であり、4層より下は地山に相当する。土だった遺構面は合計で3面存在した。各々、第1遺構面は3a'層上面、第2遺構面は3c層上面、第3遺構面は4b・5、あるいは6層上面で検出した。

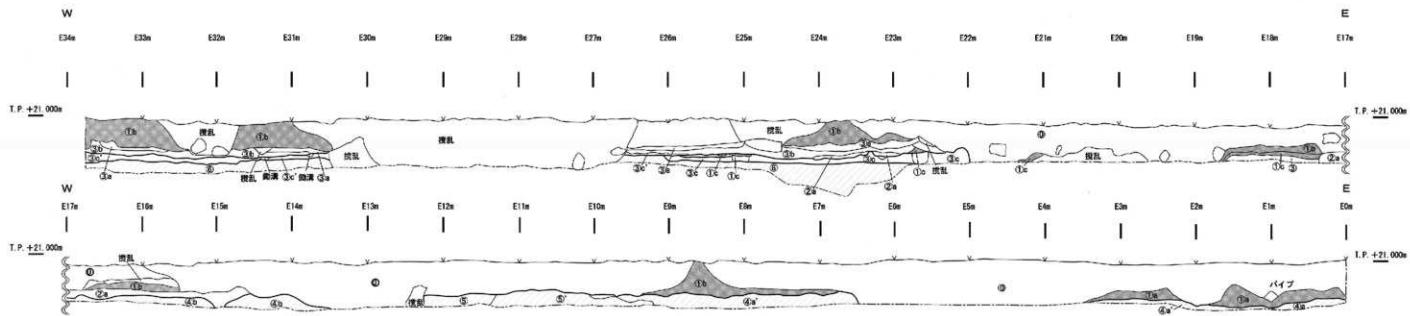
現代盛土の層は、府営住宅基礎等の破棄の際の埋め込みにより部分的に深く掘り込まれており、5～25cmの礫及び現代遺物を含む層である。この盛土の下にある1層は、耕土であり、1a層としたものが茶褐色を呈する細粒砂の現代耕土である。さらにその下に1b・1b'層があり、これらは暗灰色細粒砂の旧耕土である。

2層は2a・2b層に分かれ、2a層はオリーブ味を帯びた灰褐色細粒砂である。この層には、少量のマンガン粒が含まれ、上面が赤色化していることから酸化を受けていると考える。2b層はオリーブ灰色の細粒砂である。

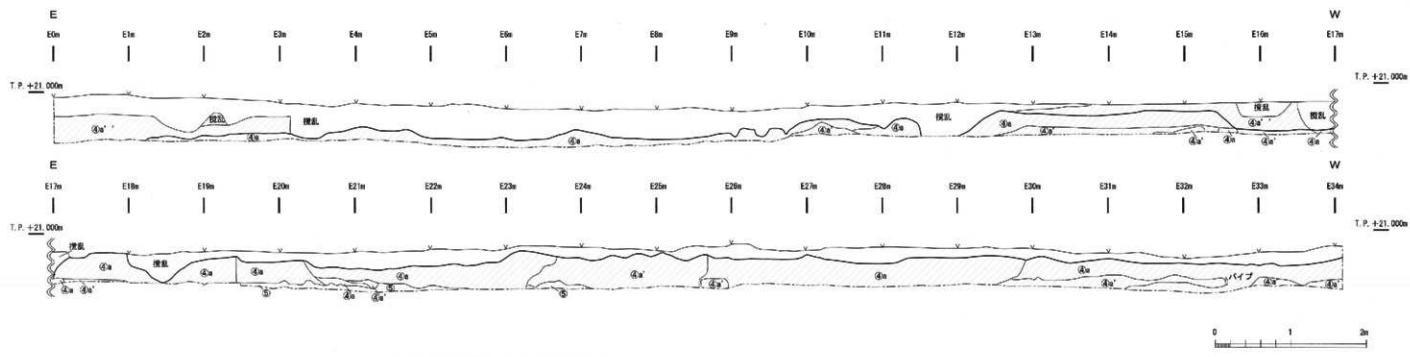
3層は細分が可能であり、この層のなかに2面の遺構面が存在する。3a層は、マンガン粒を少量含むオリーブ褐色粘質細粒砂で、床土である。その下の3a'層は3a層に比べて灰色味が強い色調を呈した床土であり、遺構面の第1面に相当する。この遺構面は調査区の北端で確認できるのみである。ここでの遺構としては衝溝、溝及びピットが検出でき、遺物としては主に陶磁器片や瓦器片が山上している。3b層では、マンガン粒を少量含む暗オリーブ灰褐色砂質シルトの層があり、その下の3c層に第2面遺構面に対応するマンガン粒を少量含むオリーブ灰褐色の細粒砂の層がある。ここでの遺構としては溝、細溝（隅溝）及び柱穴の可能性があるピットを検出しているが、遺物の出土は極端に少なかった。そして、この3c層はさらに3c'・3c''層に分けることができ、それぞれマンガン粒を含む暗オリーブ灰褐色細粒砂であり、3c''層の方が3c'層に比べてマンガン粒が多く見られる。

4層からは地山となる。搅乱直下にみられる地山で、調査区全面を通じて厚く広がり、一部第3遺構面に相当する。4層も3層同様に、計6つに細分した。4a層は砂・細礫混じりの明黄褐色砂質シルトであり、4a'層では、4a層に白灰色の砂質シルトが混ざる。さらに、4a''層では明黄褐色の砂質土となり、上部に礫が混ざる。4層の中でも異なる様相を呈しているのが4b・4b'層であり、これらは第3遺構面に相当する。4bと4b'は4a層より赤味を増した明赤褐色シルトである。4bでは細礫を、4b'ではそれより大きい礫を含む。また、同様の地山で明黄褐色砂質土で礫を多量に含む4c層がある。

## 1 北壁断面図



## 2 南壁断面図



0. 透水土（部分的に強く侵入されている・底材約25cmの層及び近代堆積物を含む）  
 1a. 黒褐色細粒砂（直径5mm程度の砂を2%含む・近代堆積物）  
 1b. 露天灰褐色細砂（透水土）  
 1c. 黒より薄い灰褐色（透水土）  
 2a. 灰褐色細粒砂・オリーブ味・マンガン鉱少量含む・上面赤褐色化（透水）  
 2b. オリーブ灰色細粒砂

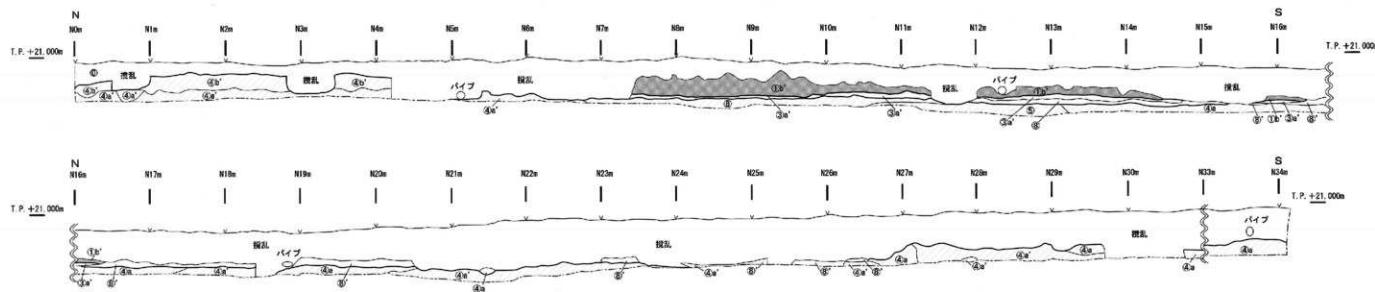
3a. オリーブ褐色粘質泥炭層・マンガン鉱少量含む（透水）  
 3a' 3aより灰色味が強い（透水土）（1面土面）  
 3b. 備オリーブ褐色粘質シルト・マンガン鉱少量含む  
 3c. オリーブ褐色粘質砂・マンガン鉱少量含む（2面土面）  
 3d'. 褐オリーブ褐色粘質砂・マンガン鉱若干含む  
 3e'. 3d'よりマンガン鉱多く含む

4a. 黄褐色粘質シルト・5% 透水性なし（地山）  
 4b. 黄褐色粘質シルト・5% 透水性なし（地山）  
 4c'. 淡黄色粘質シルト・4aより分界面・上部に堆疊じり（地山）  
 4d. 黄褐色粘質シルト・堆疊 3c%含む（地山（透水層））  
 4e'. 刺赤褐色シルト・4aより透水性（地山（透水層））  
 4f. 黄褐色粘質シルト・透水性なし（地山）

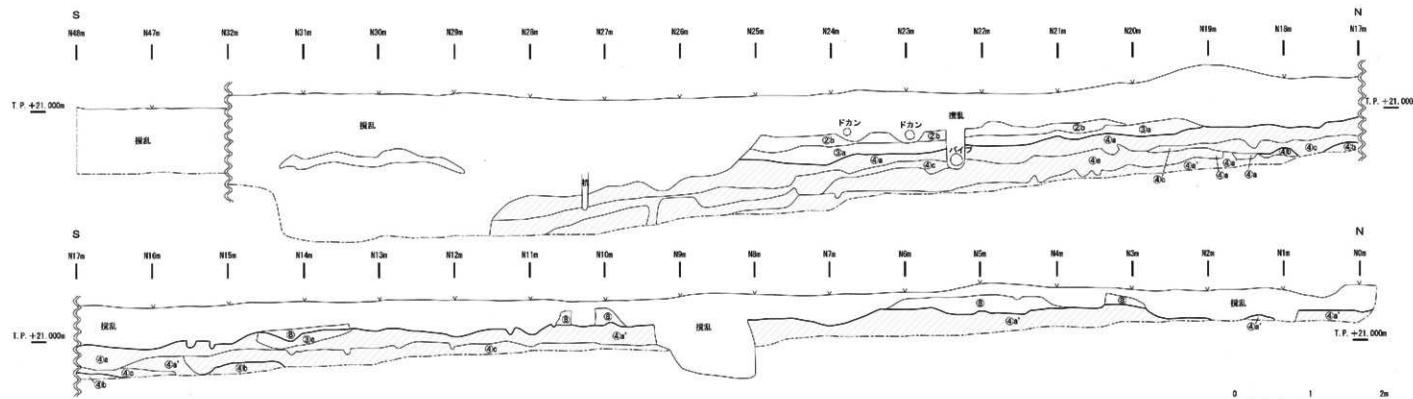
5. 白灰色粘質シルト（下にいくほど台きが増して粒子が細くなる）（地山）  
 5' .5より砂堆積多く含む（地山）  
 5b. 白灰褐色土・明赤褐色・赤褐色含む・粒径大きい（地山）  
 6. 明赤褐色シルト・透水性なし・上面に一部耕作土が混入  
 6' 耕作地の透水性・黄褐色土含む・上面に一部耕作土が混入  
 8. ほとんど粘土を含まない・灰褐色

図4 第1調査区 北・南壁断面図

1 I 区東壁断面図



2 II 区西壁断面図



0. 既代透土 (部分的に多く残り込まれている・直徑5~25cmの條及び後代透土を含む)

1a. 既代透土 (直徑5cm程度の條を3%以上含む・既代透土)

1b. 既代透土 (透水性)

2a. 明黄色透土・オリーブ地・マングン微量含む・上面赤褐色化 (透化)

2b. オリーブ地

3a. オリーブ地・白色透土・マングン微量含む (透土)

3b. オリーブ地を含む (透土) (1面・裏)

3c. 線オーバー灰褐色透土・マングン微量含む (透土)

3d. オリーブ地を含む透土・マングン微量含む (2面裏)

3e. 線オーバー灰褐色透土・マングン微量含む (透土)

3e'. 3eよりマングン多く含む

4a. 明黄色透土・シルト・砂・細粒混じり (地山)

4a'. 4aに灰色透土・シルト (地山)

4b. 明黄色シルト・砂・3%程度含む (地山・透土面)

4c. 明黄色シルト・砂より細大きめ (地山・透構造)

4c'. 明黄色シルト・砂より粗大きめ (地山)

4d. 明黄色透土・シルト・砂を多量に含む (地山)

5. 在灰白色透土シルト (下にくじほど白きが増して粒子が細くなる) (地山)

6. 5.1より細大きめ (地山)

7. 白灰色透土・明黄色・赤褐色含む・粘性大 (地山)

8. 明黄色シルト (地山)

9. 明黄色透土・黄褐色透土含む・上面に一部耕作土が混入

10. 黄褐色透土を含まない・灰黑色

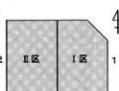
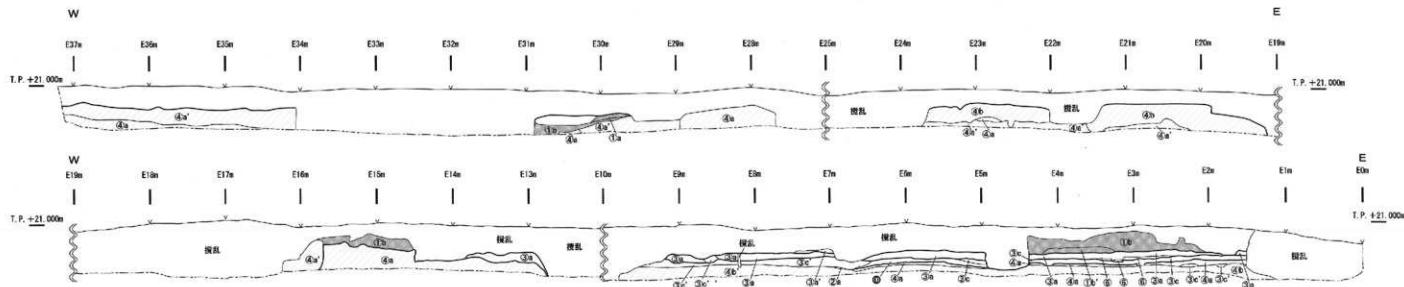
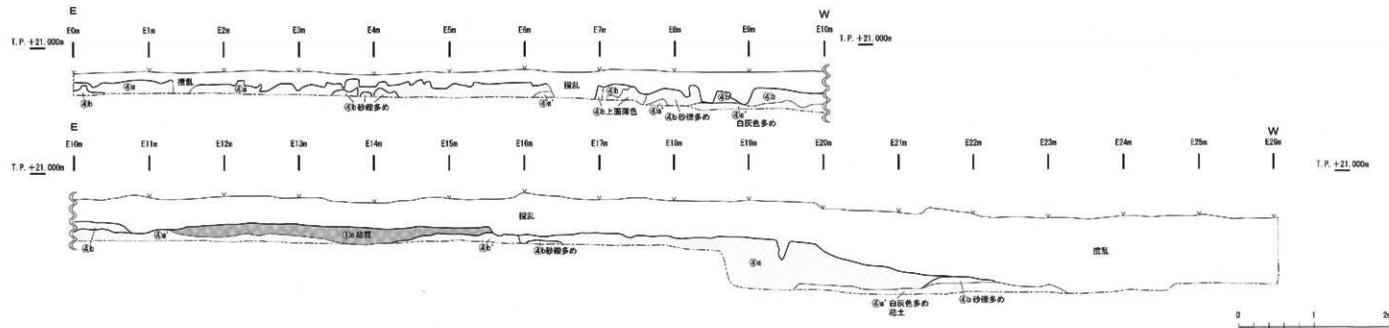


図5 第I調査区 東壁・II調査区 西壁断面図

1 北壁断面図



2 南壁断面図



0. 現代遺土 (部分的に剥き出されている。直徑5~25cmの隙及び現代遺物を含む)  
 1a. 黄褐色細粒砂 (直徑3mm程度の砂を2%含む・近代粘土)  
 1b. 橙褐色細粒砂 (粘土)  
 1b'. より薄い灰褐色 (粘土)  
 2a. 灰褐色細粒砂・オリーブ味・マンガン少含む・上部赤褐色化 (酸化)  
 2b. オリーブ灰褐色細粒

3a. オリーブ褐色細粒細砂・マンガン少含む (底土)  
 3a' 3aより赤褐色が強い (底土) (1回上部)  
 3b. 細オリーブ灰褐色の黄シルト・マンガン少含む  
 3c. オリーブ灰褐色細粒砂・マンガン少含む (2回上部)  
 3c' 3cよりマンガン多く含む

4a. 明黄色細粒シルト・少・細粒白じり (地山)  
 4a' 4aに白色斑点ある・細粒シルト (地山)  
 4b. 明黄色・4aより粉質・上面に漂泥じり (地山)  
 4c. 明黄色シルト・複数3%位食む (地山 (透水層))  
 4d. 黄赤色シルト・4bより颗粒大きめ (地山 (透水層))  
 4e. 黄赤色シルト・4cより颗粒大きめ (地山 (透水層))  
 4f. 明黄色細粒土・供を多量に含む (地山)

5. 白灰色細粒シルト (下にいくほど白さが増して粒子が細くなる) (地山)  
 5' 5より分離多く含む (地山)  
 6. 白灰褐色土・明黄色、赤褐色含む、粒性大きい (地山)  
 6' 粒性大きい (地山)  
 7. 灰褐色細粒土・灰褐色點土含む・上面に一般耕作土が混入  
 8. 8ほど粘土を含まない、灰褐色

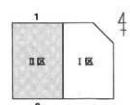
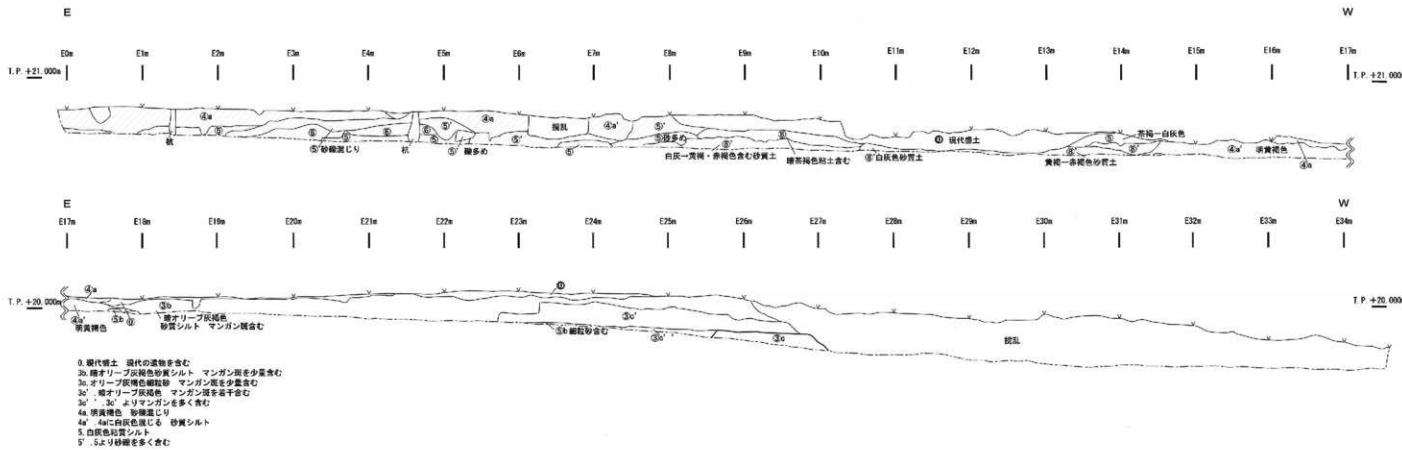


図6 第II調査区 北・南壁断面図

1 確認トレンチ 1



2 確認トレンチ 2 (谷の肩)

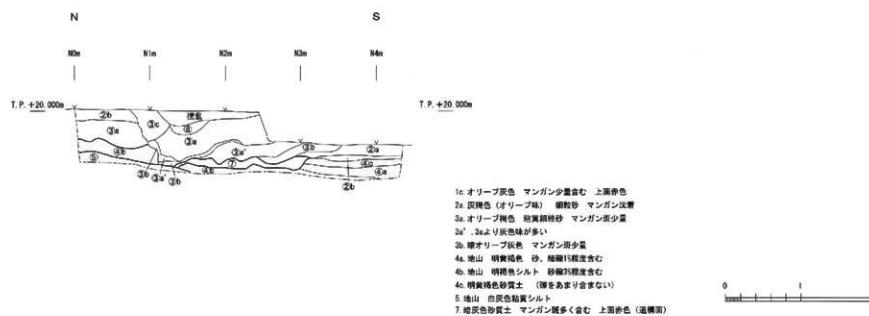


図7 第II調査区 確認トレンチ断面図

5層も上面が第3遺構面に相当する部分を有する地山であるが、4層とは異なり白灰色を呈する粘質シルトである。下へいくほど白さが増し、粘性が強くなる特徴をもつ。5'層は5層より砂礫を多く含んでいる。5 b層では同じ白灰色の粘土だけでなく、明赤褐色と赤褐色の粘土を含み、粘性の強い層である。

6層も、4・5・6層同様に上面が第3遺構面に相当する明褐色の粘質シルトの地山である。

7層は、第II調査区内確認トレンチ2で検出した谷の肩でのみ確認できたマンガン斑を多く含む暗灰色の砂質土である。上面が赤色化していることから酸化を受けていることがわかる。

8層は黄褐色粘土を含む赤褐色の砂質土で、上面の一部に耕作土が混入する。また、8'層では8層に含まれていた黄褐色の粘土をさほど含まず、灰色味をおびる。

以上のように、基本層序を大きく8層に分けることができたが、第I・II両調査区を通じて南側は著しく攪乱を受けているため、攪乱土を除去するとすぐに地山である4層が露出する部分がほとんどであった。耕土をはじめとする地山でない地層は、全体的に薄くまばらにのびるのみで、安定して一定の広がりを確認できたものは少ない。そのため、本調査では、第1遺構面は調査区北端にのみ、第2遺構面は中央部にのみ検出でき、第3遺構面は複数の異なる層の上面にまたがって検出した。

(大向 智子)

## 第5章 調査成果

### 第1節 上層の遺構

今回の調査では、第Ⅰ・Ⅱ調査区ともに、主に3面の遺構面を検出した。しかしながら、第1遺構面及び第2遺構面は調査区全域に広がるものではなく、一部のみにしか存在せず、ここで図示する以外の地区では後世の整地により削平されたようである。それらの箇所では、機械掘削で現代盛土を除去後すぐに、第3遺構面が露出する。ここでは、第1・2遺構面に相当する上層遺構について述べる。調査区全域に及ばないとはいえ、これらの上層遺構の検出により、当該調査地内における一定の土地利用パターンを推測することができた。

まず、第1遺構面は3a層上面で検出した。第Ⅰ・Ⅱ両調査区にまたがって存在し、遺構の継続も確認できたが、調査区の北端にしか存在しない(図10)。東西方向よりわずかに南へふれる細溝群であり、耕作にともなう鋤溝の痕跡であろう。Ⅰ区の範囲では、ピットもいくつか検出しているが、建物と確認できるものはなかった。Ⅱ区内では、北端に区画溝の可能性を有するやや大きな溝を検出した(SD II -04)。この溝も鋤溝と同方向にのび、Ⅱ区の中程で調査区外へ向かう。溝の中央は、調査前に存在した府営住宅にともなう埋管によって擾乱をうけて消失する。

第Ⅰ・Ⅱ調査区ともすべての遺構面を通じて、出土遺物が極めて少なく、またさらに残存状況も良好ではないため、出土遺物による遺構の年代決定は難しい。しかしながら細片ではあるが、ここでは陶磁器片及び瓦器片が少量出土した。図化し得たものは次章の第1節にある、図23-5の瓦器椀、同9の白磁椀がそれにあたる。9の白磁椀は概ね13～14世紀の年代が推定できるが、図化し得ない破片には、当該時期よりもさらに新しい様相をもつ陶器や、すり鉢の細片が出土しており、これらの遺構は概ね中世末頃～近世にかけての遺構であると考える。ただ、区画溝(SD II -04)に関しては、第2遺構面においても土地割りと遺構の方向が変化しないことから、第1遺構面の時期よりも古くに造られ、長期に渡って踏襲して使用された可能性も考えうる。

第2遺構面は、両調査区ともにおいて2つの地点に分かれた位置で検出した。3c層上面にある。1ヶ所めは、第1遺構面同様に調査区北端である。第1遺構面の下層より、同様に耕作に

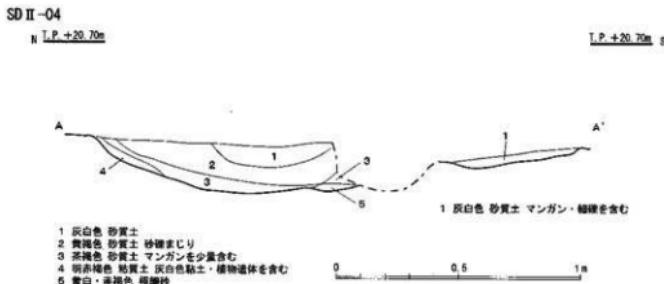


図8 第II調査区第1遺構面 SD II -04 断面図

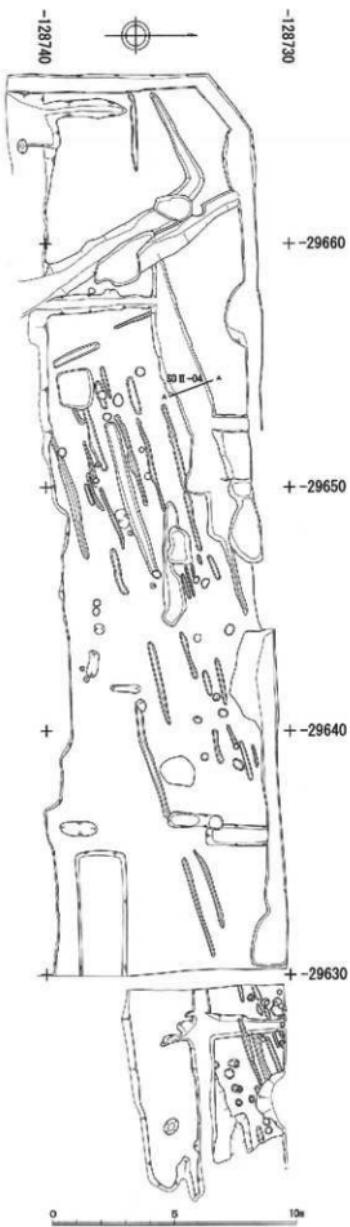


図9 第I調査区北端 第2遺構面平面図

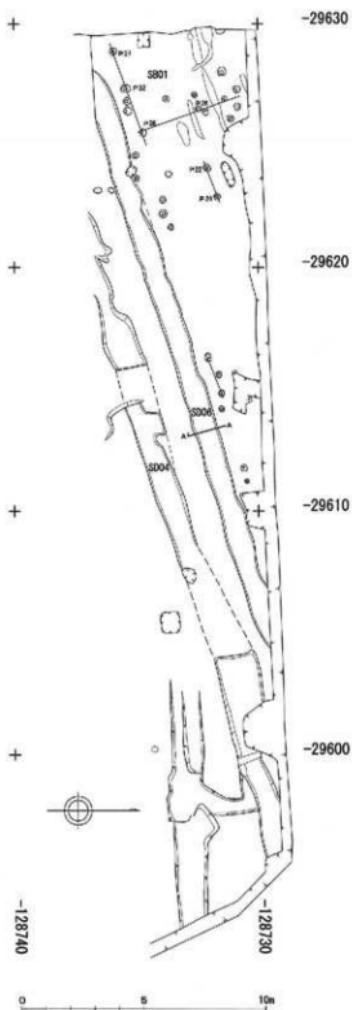


図10 第I・II調査区北端 第1遺構面平面図

ともなうであろう溝及び細溝群（鋤溝）を検出した。茶色味がかった灰褐色を呈するやや粘質の細粒砂に黒色のマンガン斑が多く混じる層をベースに、たいていの細溝は青味がかった明灰褐色の粘土を埋土としていた。図9にあるのはI区にあたる部分のみであるが、西のII区では鋤溝を検出した。上層のSD04とほぼ同規模で同方向へ平行にのびる2条の溝SD04とSD06は、上層遺構同様に埋管にともなう擾乱によって途中で削平される。これらの溝に加えて、I区内では柱穴の可能性があるピットをいくつか検出した。特に、P37・32・38・26は等間隔で地割りに沿って並び、掘立柱建物SB01の存在が推定できる。その他にも、P22と24などのように対になる柱穴を検出した。第2遺構面では、II区内にあたる西側は耕作地、I区内にあたる東側は居住域として利用された。建物は耕作地に隣接することからも、住居というよりは倉庫的性質を備えたものだったのかもしれない。

もう1ヶ所は、I区では調査区東端中央（図13）、II区では調査区南西部（図14）にあたる。ともに、東西方向より南にふれる角度でのびるが、II区の鋤溝群の方がふれ幅が大きく、ほぼ北東から南西方向にのびる。I区東端の一群は、前述の一群と同一方向であり、同時期のものであることを想定する。ここでも、第1遺構面と同様に出土遺物は少ないが、少ない中からも概ね中世にあたることがわかる。各々、鋤溝群と直交から平行にL字型に屈曲する区画溝をともなう。区画溝に囲まれた地区が一段低い位置にあり、そこに鋤溝が集中する。区画溝の屈曲する位置には、素振りの井戸をともなうが、これは溝の完掘後に下層にともなう遺構として検出したため、詳細は後述する。II区の一群は残存状況が極めて良好で、溝だけではなく畝の隆起部分も明

SD06-1

4 T.P.+20.80m

— S —



(社1)

図11 第2遺構面 SD06 断面図

P37

T.P.+20.80m

P32

T.P.+20.80m

P26

T.P.+20.80m

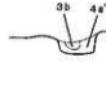


図12 第2遺構面 柱穴断面図

瞭に確認できた。この遺構にともなう遺物はほとんど出土していないため、時期の同定は難しいが、これより下層から、白磁や土師器など中世の遺物が少量ではあるが出土しているため、13～14世紀をさかのぼることははない。ただ、前述のI区の遺構群とは溝の方向が異なり、整地区画の主軸方向も異なるため、同時代のものではない可能性が高い。遺構は淡いオリーブ灰褐色の砂をベースとし、この土もこの鋤溝群のみに限られた特徴である。

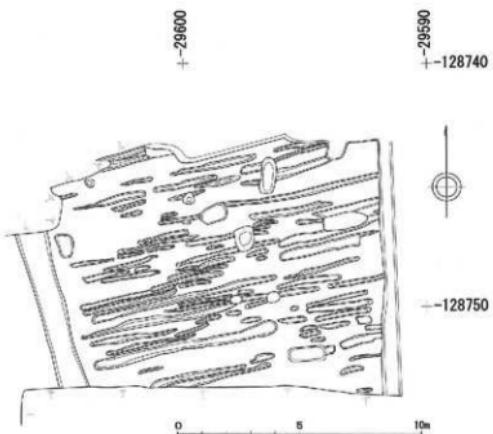


図13 第I調査区 第2遺構面鋤溝群平面図

これら上層の遺構群は、ほぼすべてが耕作にともなうと想定できるものであり、中世以降はこの地域が耕作地として継続的に利用されていたことがわかった。出土遺物が極端に少ないのもそのためであろう。

(註1) 図中の地層注記において、層序番号・記号のみの記述は第4章基本層序を参照されたい。

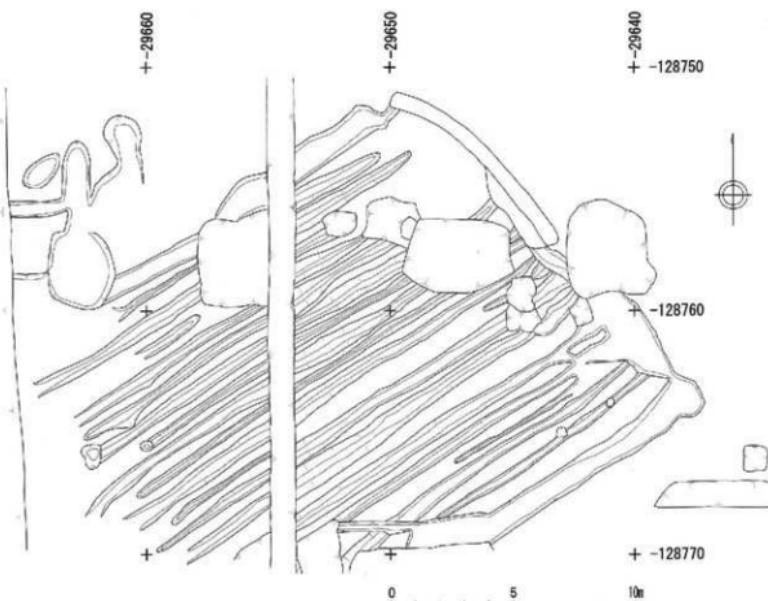


図14 第II調査区 第2遺構面鋤溝群平面図

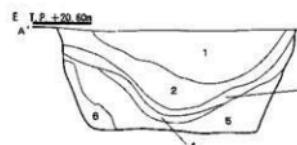
## 第2節 下層の遺構

第3遺構面は、主に地山である4・5層及び6層上面に存在したが、擾乱が著しく第1・2遺構面が削平されていたI区の中央から南半にかけては、機械掘削の後すぐに露出する地区もあった。ここを調査最終面とし、全面に渡って遺構を検出した。

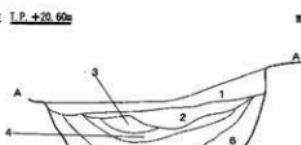
I区では、第1・2遺構面が存在した北部は、明褐色粘質シルトを埋土とする谷間となり、この谷はII区へ続く。この谷の埋土は、粘度が極めて高く人為的に攪拌された痕跡は見当たらなかった。ただ、II区では、この埋土から須恵器の壺や甕の細片が出土しており、谷の埋没時期は古墳時代～平安時代にかけてであったと考える。谷の肩に近いところでは、同色の土がやや粗く砂状になり浅くで谷の底を検出したが、II区では極端に深くなるため全域の完掘はできなかった。攪乱をうけた位置をのぞき調査区内において検出できた範囲では、最も深いところで、TP+19.00mを下回り、穂谷川へ向かって北東から南北方向へ下る。調査区を斜めに横切る谷であり、II区の北端では、白っぽい灰色粘土の肩を検出した（註1）。I区の東側の肩では、谷の埋土と同色を呈するが砂粒が粗くなり、堅く縮まる。

II区は大半がこの谷の中にあたり、主だった遺構は区画溝の角にあたる位置の底にあった素掘りの井戸と隣接する溜め池状の長方形土坑のみである。I区でも前述のように、L字状を呈する区画溝の交点に、径2m前後の素掘りの井戸を検出した。井戸内から遺物は出土しなかった。このL字の南北方向部分に切られた状態の区画溝SD07が存在し、さらに平行してSD08が走る。この2条とはやや距離をおいて、さらに5mほど西にもう1条の溝（SD09）が平行に走る。これらの溝に切られた状態で、2基の方形周溝墓を検出したが、それについては別途次項で詳細を述べる。また、炭状の堆積物を有する土坑を検出したが（註2）、これは地山直上にのる遺構ではあるが、そのすぐ上層まで現代の攪乱が達していたため、新しい時期のものである可能性も高い。その他に、I区の中央部では多くの風倒木の痕跡を確認した。平面ではL字もしくはコの字に近い形状を呈する溝に見えるが、掘削すると、片側には肩が検出できるが、反対側も平行に斜

SD07-2



SD07-4



- 1 明褐色 粘質土 中層を少量含む
- 2 暗褐色 粘質土 脱離を極少量含む
- 3 暗褐色 粘質土 微量を含む
- 4 非褐色 粘質土 剥離を極少量含む
- 5 非褐色 粘質土 中層を極少量含む
- 6 暗褐色 粘質土 明褐色ブロックを極少量含む

- 1 搾乱土
- 2 暗褐色 粘質土 暗色の大ブロックを少量含む 中層を少量含む
- 3 粘質土 灰色の大ブロックを少しがくらむ
- 4 非褐色 粘質土 脱離を極少量含む
- 5 非褐色 粘質土 暗色の大ブロックを少量含む
- 6 明赤褐色 粘質土 明褐色 大ブロックを多く含む

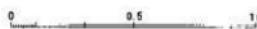


図15 第I調査区 区画溝SD07断面図

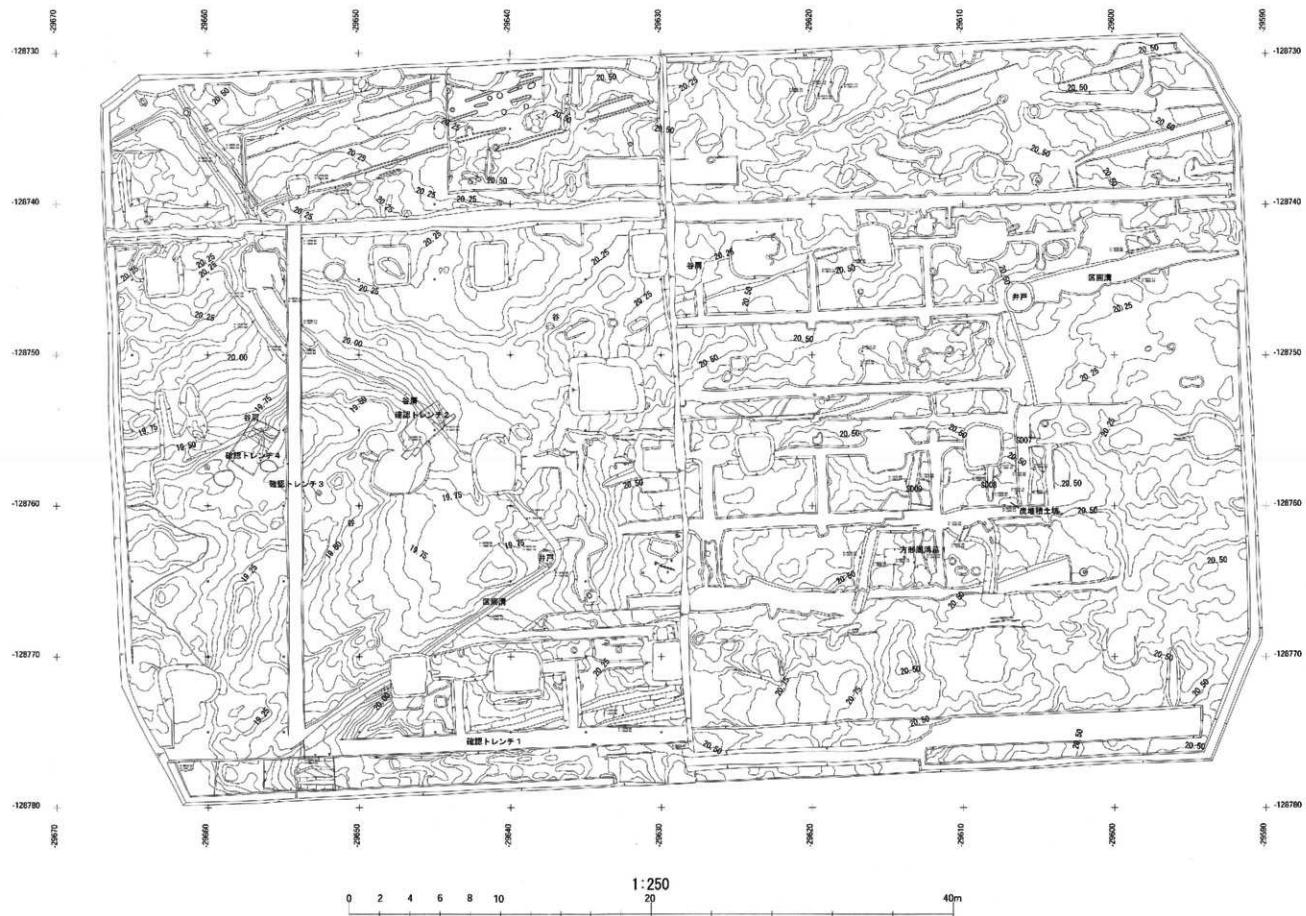


図 16 第 I・II 調査区 第3構造面平面図

めに壁が食い込み、溝の肩の体をなさない。ただ、埋土の砂粒に含まれる長石に新鮮なものがほぼなく、摩耗して白く濁ったものが大半であることなどから、かなり古い時に形成された風倒木の痕跡群である可能性はうかがえる。

(註1) 第4章の図7-2確認トレンチ2を参照されたい。

(註2) 卷末の写真図版4下段を参照されたい。

### 第3節 弥生時代の方形周溝墓

第I調査区の南半の一部で、方形周溝墓を3基検出した。3基とも墳丘本体の上部はほとんど削平されており、溝の下半が残存するのみであった。また、一部は攪乱の著しい地区と重なり、完全な形状で検出できたものはない。

その中でも、最も残存状況が良好であったのは方形周溝墓1である。攪乱により南北の全長は不明であるが、東西長は約8.5mを測るコの字形の溝を検出した。溝の底部はU字に近い形をなすが、屈曲部では幅がひろがり不整形になる。検出した墳丘西側の南北溝の南端部の底で、長さ約1.87m、幅約0.8m、深さ約0.4mの平面形状が橢円形を呈する掘り込みを検出した(註1)。溝を完掘するまでは検出できなかったため、溝の底にほとんど土が堆積していない状態から掘り込んだものであり、中から遺物は出土しなかったが墳丘築造時からそう時間をあけないでつくられたであろう。周溝内埋葬であろうと考える。東西長をもとにほぼ正方形に近い形を想定して墳丘の復原を試みると、墳丘西側の南北溝の中央よりやや南側近くに位置することになる。

墳丘上で、2ヶ所の平面形状が長方形の掘り込みを検出し、主体部の痕跡の可能性を想定して掘削をしたが、出土遺物も痕跡も全く確認できず、主体部の痕跡であるとは断定できない。性格不明の土坑であり、後世のものである可能性も残される。

墳丘東側と西側の周溝内2ヶ所において土器が出土した。特に東側に集中しており、土器は摩耗した破片ばかりであるが、図化し得たものはすべてここからの出土である(次章図21)。それらは溝の中にあったが、底部に密着していた訳ではなく中層あたりにあったことから、本

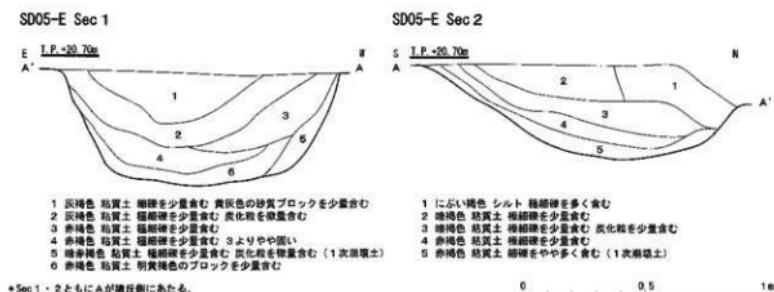


図17 第I調査区 方形周溝墓1 SD05 断面図

来は墳丘上に置かれていたものが、ある程度溝が埋没した時点で落下したと考える。口縁端部の破片から、少なくとも3個体は存在したことがわかる。すべて弥生時代中期に属するものであり、口縁端部の形状、櫛描き文や壺の頸部のプロポーションなどから、畿内Ⅱ様式～Ⅲ様式にあたり、これを周溝墓の築造年代とみてよいであろう。周辺では、南東200mほどの場所でおこなった招提中町遺跡において、Ⅱ様式にあたる方形周溝墓が42基以上も集中して見つかっており（註2）、これも同様の時期からわずかに新しい時期にかけての間に属するであろう。

周溝墓1の北西約10mのところで、同様に底部がU字に近い形状をした溝をL字型に検出した。これを方形周溝墓2とするが、残存状況は検出した3基の中で最も悪く、溝の底部から

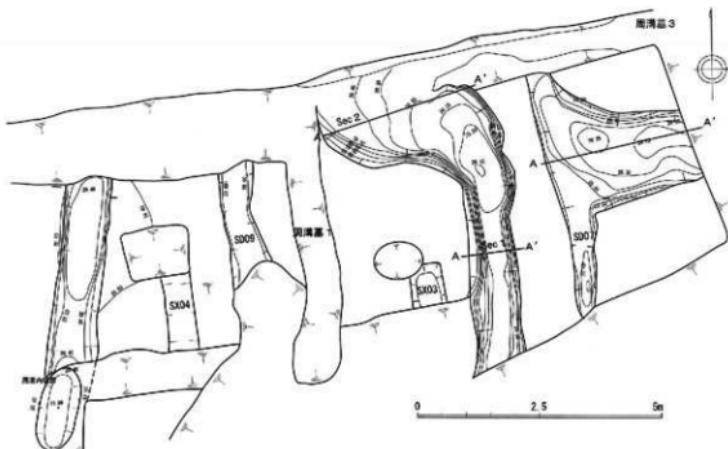


図18 第I調査区 方形周溝墓1・3測量図

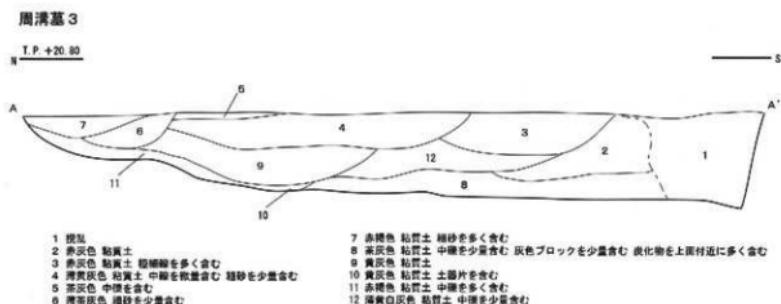
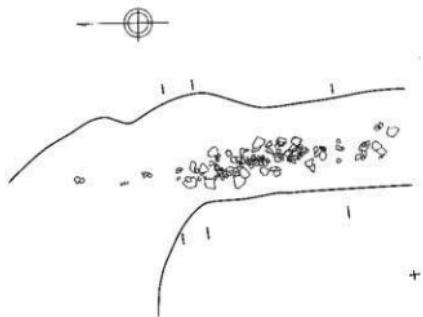


図19 第I調査区 方形周溝墓3 周溝断面図

方形周溝墓 1 周溝北東部



方形周溝墓 1 東側周溝

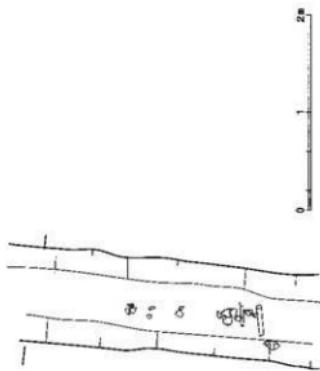


図 20 第 I 調査区 方形周溝墓 1 周溝内土器出土状況図

10cm にも満たない部分が残されていたのみである。遺物も周辺からは出土していない。

またさらに、もう 1 基、周溝墓 1 の東に隣接して、L 字に近い鈍角に屈曲した溝を検出した。方形周溝墓の南西隅部にあたり、これを方形周溝墓 3 とする。検出した溝は、残存長で南北約 2.5m、東西約 2.5m、幅約 0.6 ~ 2.5m を測る。墳丘西側の南北周溝は、区画溝 SD07 に完全に切られており、SD07 はこの西側周溝を再利用し、伸延してつくられた可能性がある。あるいは招提中町例の傾向を見ると、西側周溝は最初から掘削されていなかったのかもしれない。墳丘南側周溝の東端隅近くで、数点の弥生土器の破片が出土した。土器はどれも摩耗しており、図化し得るもの、時期の特定につながるものはないが、周溝墓 1 とは重ならずに隣接する位置関係から、先行関係は不明ながらも 2 基はそう時間をあけずに築造されたと考える。角の部分で溝斜面の傾斜が緩やかになり、溝幅が広くなる特徴は周溝墓 1 にも極めて類似する。

これら 3 基の方形周溝墓は、いずれも調査区中央から南半にかけての微高地状の地形を呈する地区に限って造られていた。周溝墓 2 より西及び北ではなく、これが西限である。周溝墓 1 の北側も区画溝を検出したのみで、これも北限にあたる。それより東の周溝墓 3 では南東角を除いた大半が擾乱により削平されており、墓域の限界が明らかでない。南部も同様であり、この墓域は本調査区で検出した 3 基を北西限とし、おそらくここから南東にひろがるであろう。

(小川)

調査に際しては、藤澤真依、三宅俊隆、一瀬和夫、西田敏秀、大竹弘之、井西貴子、菱田哲郎、小倉徹也、若林邦彦、市川 効、松浦暢昌、田村隆明、田村美沙、前田俊雄、野島智実、大向智子、堂ノ本智了、江藤 梓、北川正人、下堂文寛、山口 亙、山田昌恵（敬称略）他諸氏にご指導・ご協力を賜りました。ここに記して厚く謝意を表します。

(註 1) 卷末の写真図版 6 を参照されたい。

(註 2) 大阪府教育委員会『招提中町遺跡』一府営枚方牧野東住宅建て替えに伴う弥生時代墓域の調査

大阪府埋蔵文化財調査報告 2001- I 2002 年 3 月

## 第6章 出土遺物

### 第1節 出土土器について

今回の調査では弥生時代から中世にかけての幅広い時期の遺物が出土した。ここでは時期ごとに出土遺物のうちでも主に土器類の説明を中心におこなう。

#### 弥生時代遺物（図21—1～11）

当該期に相当する遺物には弥生土器および石器がある。1～10は弥生土器である。器種の判明するものはいずれも長頸の広口壺であり、出土部位には口縁部、頸部、肩部などが確認できる。1～3・7は壺の口縁部である。1～3は口縁部が大きく外反し、3は口縁部をわずかに下方に拡張させる。7は端部までは残存していないものの、口縁部であると考える。4は壺の頸部である。外面には櫛描直線紋が施される。5・9は壺の肩部である。5は外面に櫛描直線紋が施される。9も壺の肩部と考えられるが、こちらには櫛描直線紋はみとめられない。

6は底部のみが残存する個体で、径は6.0cmである。8・10は弥生土器の体部の破片である。いずれの外面にも櫛描直線紋がみとめられる。他の資料との比較から、この破片も壺である可

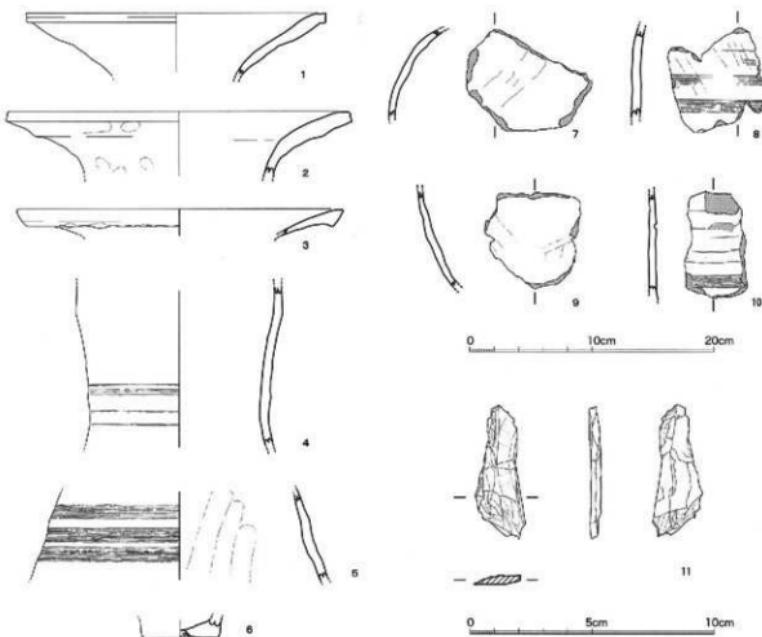


図21 出土土器 弥生時代

能性を考える。これらの弥生土器はすべて、第Ⅰ調査区第3遺構面で検出した方形周溝墓1の周溝内(SD05)から出土したものである。

11は第Ⅱ調査区の北側溝から出土したサヌカイト剥片である。横長の剥片であり、刃部の形成はみとめられない。

これら出土遺物の時期については、いずれも摩耗が著しく細かな時期の同定は困難であるが、弥生土器の器種、器形、紋様などから弥生時代中期中葉であると考える。なお既往の調査でも弥生土器の出土がみとめられているが(枚方市教育委員会2004)、今回の出土資料とは時期に大きな差異はないものと考えられる。

#### 古代遺物(図22-1~5)

当該期に相当する遺物はいずれも須恵器である。1は蓋で、端部のみの小破片であり、つまりの有無やその形状は不明である。2は壺の頸部から体部にかけての部位である。3~5は蓋である。3は口縁部で、ナデによって口縁端部に屈曲を作り出している。4・5は体部の破片であり、いずれも外面にはタタキが施され、内面には同心円文の當て具痕が残されている。4には外面に、3・5には内外面、さらに断面にも自然釉の付着がみとめられる。

これらの出土遺物は蓋の形状などを勘案するとおおよそ飛鳥IV~V期から平安時代に相当するものと考える。1の蓋は端部形状からやや新しい時期に属する可能性がある。しかしながら当該期に相当すると考えられる出土資料は少なく、時期の断定をおこなうのは困難であり、古代を中心として一定の時期幅をみるのが妥当であろう。これらの須恵器類はすべて第Ⅱ調査区内からの出土であり、調査地内の西半に集中する。

#### 中世遺物(図23-1~11)

当該期に相当する遺物には土師質土器・瓦器・陶磁器などがある。1~3は土師質小皿である。いずれも口径10cm以下の小型品であり、内外面ともにナデによる調整がなされている。1はより新しい様相を示すが、2・3は伊野編年(伊野1995)のDタイプにあたり13世紀頃のもとのと考える。

4~6は瓦器碗である。4・5は口縁部で、6は高台部である。口縁端部はやや尖り気味に丸く納め、外反しない。このようない特徴は、棹葉型碗の特徴である。5は第Ⅰ調査区第1遺構面のP14から出土した。6の高台は断面が三角形ではなく、四角形でしっかりと足の張ったものである。なお出土している資料はいずれも小破片であるため、ミガキなどの痕跡は確認できない。これら

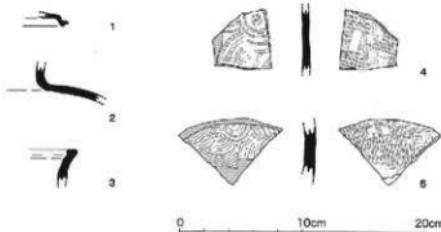


図22 出土土器 古代

の瓦器椀の時期であるが、資料に制限があるため時期を特定するのは困難である。ただし6の高台形状からは11世紀末という年代が考えられる。

7～11は磁器であり、7～9・11は白磁、10は青磁である。7は蓋で、8～10は碗である。いずれの資料も小破片であるが、8

は第I調査区第2構造面の遺構内(SX02)から出土した。9・10の高台はいずれも削り出しによって成形されており、高台断面は9が三角形で、10は四角形である。11は高台をもつ底部であるが、径が11.2cmと大きく碗とは考え難い。これらの磁器の年代は資料に制約があるために特定は困難であるが、おおむね13～14世紀と考える。

これらの土器類・石器に加えて、焼土塊が出土した。

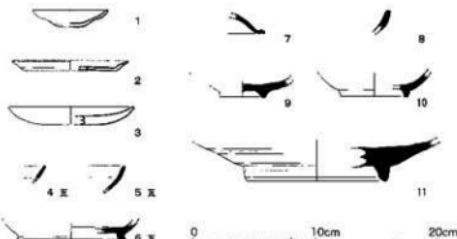


図23 出土土器 中世

(前田 俊雄)

#### 〈引用・参考文献〉

伊野近富 1995『土師器皿』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

尾上 実・森島康雄・近江俊秀 1995『瓦器椀』『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社

西 弘海 1978『土器の時期区分と型式変化』『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所

枚方市教育委員会 2004『九頭神遺跡』II

森田克行 1990『摂津地域』『弥生土器の様式と編年』近畿編II 木耳社

山本信夫 1995『中世前期の貿易陶磁器』『概説 中世の土器・陶磁器』中世上器研究会編 真陽社



## 第2節 出土瓦について

今回の調査で出土した瓦のうち、形状を明確に識別することができたものは、軒丸瓦の破片1点（1）と平瓦の破片1点（2）である。

軒丸瓦（1）は第1調査区第1遺構面の1層、耕作土中より出土した。内区の複弁の花弁の一部分と外区の劍頭文状の文様の一部が残り、中心部分は欠失する。約25%の残存率であり、軒丸瓦の方向は確定できなかった。この文様の瓦は他所での出土例がなく、九頭神廃寺特有の軒丸瓦として知られる。また1の破片は、九頭神廃寺出土瓦のKZM22、もしくはKZM21のいづれかであることまでは確認できたが、瓦当面の摩滅、及び残存状態の悪さからそれ以上の特定はできなかった（註1）。しかし、九頭神廃寺ではこの軒丸瓦の瓦版はどちらも一版ずつしか確認されていないので、同范であると推定できる。検討の参考とした九頭神廃寺出土の瓦当（3）は、複弁八弁蓮華文を有するもので瓦当面径が19cmで、直径3.8cm程度の小さめの中房内には1+6の蓮子を配する。1は、九頭神廃寺例と同様に、内区の花弁が盛り上がり、弁端に葉状の文様を付加するようだ。重弁蓮華文を意識したものといわれている。外区に残る文様は立体的に劍頭文状の文様を重ねている。九頭神廃寺では、「花弁文」と呼ばれる（註2）。

これらは遺構内から出土したものではないため、本調査区で検出した遺構の年代特定にはおよばないが、瓦の製作年代はいわゆる白鳳期にあたる。この九頭神廃寺出土資料と同型式の軒丸瓦（1）は、寺の廃絶後に整地や耕作といった後世の生活行為などにより運ばれた土とともに、本

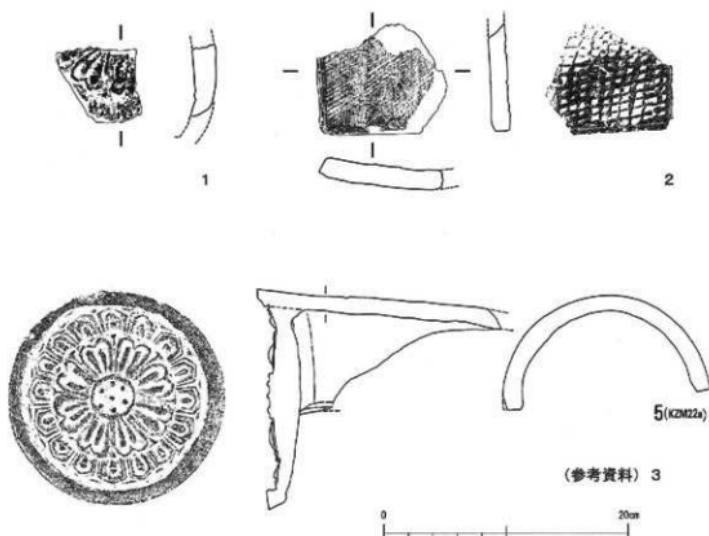


図24 出土瓦

調査区まで持ち運ばれた可能性  
がある。

2の平瓦は、焼成が良好で青  
灰色を呈し、凸面の斜格子模様

が明瞭に残ったもので、残存長

が縦9.5cm、横10cm、厚さ1.7cmの破片である。おそらく広端辺であると考える。裏面には糸  
切り痕と布目が確認できる。4.3cmの桶の幅が確認できることと側面形態から、桶巻きつくりと  
考える。側面と端面の両側を丁寧に面取りしている。凸面には2種のタタキを確認でき、九頭神  
廃寺の他の平瓦には見られない特徴である。タタキをナデで消した痕跡も確認できる。北面の建  
物や中央伽藍から主だって出土するものではない。こちらも攪乱からの出土であるため、遺構の  
年代特定にはおよばないが、瓦の製作年代は軒丸瓦同様に白鳳期である。

また、残存状態が悪く図化しえなかつたが、1と同様に耕作土中から1点、谷の埋土から1点  
平瓦が出土している。どちらも表面が摩滅し、タタキは判別できないが、谷の埋土から出土した  
ものは裏面に布目を残す。

(堂ノ本 智子)

(註1) 九頭廃寺山十瓦の型式名については、竹原伸二氏(註2参照)による分類に準拠する。

実際の瓦の観察と型式の同定については、狩野美那子氏(枚方市教育委員会)にご教示をいただいた。

(註2) 枚方市教育委員会『九頭神廃寺』—九頭神廃寺— 1997年

#### 【参考文献】

財団法人枚方市文化財研究調査会『九頭神遺跡』Ⅱ 2004年3月

財団法人枚方市文化財研究調査会『九頭神廃寺』2007年3月

枚方市教育委員会『九頭神遺跡』—九頭神廃寺— 1997年

表3 出土瓦観察表

番号	登録番号	出土地點	種類	全長	厚さ	形状		色調	胎土	焼成
						凸面	凹面			
1	028	1西上耕作土	丸瓦	9.5 (5.9)	1.9	更が丸瓦 唐草文	ナデ	灰白	褐赤	玉
2	175	トレンチ5複乱	平瓦	10.9	1.7	タタキ	山口	青灰	暗	玉

## 第7章 まとめ

平成19年度の調査では、弥生時代から中・近世にかけての遺構が見つかった。調査地には府営住宅が建てられていたため、建物基礎や埋管などにより攪乱を受けている箇所が多くあった。そのため、調査区全域に広がり得るような遺構においても、一部分のみしか検出できないところが多くあった。

まず、中世以降の耕作土の堆積が残存していた調査地内の北部では、中世から少なくとも2面の耕作の痕跡を確認できた。東西方向よりやや南にふれる鋤溝群である。主に2面の畑の痕跡を検出したが、少なくともさらに2面には細分できた箇所もあった。調査区の北部では、これらの耕作土の下に、地山あるいは谷の埋土が広がる。加えて、第I調査区では調査区中央部東端に、L字型の区画溝とその屈曲点にある井戸に囲まれる形で、南北約10m×東西約13mの範囲において同様に鋤溝群を検出した。この耕作域の東限及び南限は各々調査区の端と攪乱に切られて確認できていないため、さらに広がる可能性は高い。第II調査区でも西部に同様の区画溝に囲まれた耕作痕を検出した。こちらは幅40~80cmの単位で、溝だけではなく高さ10~20cmほどの畝も明瞭に残る良好な残存状況であった。溝と畝の方角は、第I調査区よりさらに南にふれ、ほぼ北西から南東方向にのびる。この耕作土の下層は谷にあたる。

調査地の中央部は、耕作土の堆積があった場所ではそれらの下層に、また耕作土が削平されていた場所では現代盛土の直下に、谷の埋土あるいは地山が広がる。第II調査区の大半は谷にあたり、第I調査区では、谷は西端の一部にかかるのみである。この谷は、穂谷川に向かって南に下降する。調査地内において谷底が確認できた位置の水準値及び周辺の地形測量をもとに、図25のように谷の復原を試みた。埋土にさほど多くの遺物が含まれているわけではなく、また年代決定の指標になるような出土遺物もほほないため断定はできないが、調査地内から出土した須恵器のほぼすべてはこの谷の埋土から出土したものであり、また奈良~平安時代のものと推定できる須恵器も含まれるため、平安時代前後にこの谷の埋没時期を想定したい。とすればこの谷は、本調査地より200mほど西に位置していることが近年の調査により明らかにされつつある九頭神魔寺の寺域の明らかな東限にあたるであろう(註1)。

その他、谷の東外にあたる地山の上面では、第I調査区中央部から北部にかけて風倒木の痕跡を多数検出した。これらは耕作土を除去した後の調査区北部でも検出し、さらに道を挟んで北側の枚方市による調査地(218次)内においても同様に検出される(註2)。これらの風倒木の痕跡は埋没状況や、いったん埋没した後に中世の区画溝に切られている状況からみて、後述の方形周溝墓と同時代、あるいはそれ以前というようかなり占い段階に形成されたものである可能性が高い。

そして、第I調査区の南部では弥生時代の方形周溝墓3基が存在した。やや黄色味を帯び赤褐色の地山上面に、赤褐色のシルト~粘土の溝埋土を検出した。各々の周溝墓については第5章で

述べた通りであるが、ここでは墓域について若干の考察を試みたい。今回検出した方形周溝墓は3基であるが、調査地内においては各々の周溝墓が擾乱により削平されていて、完全な形で検出できたものはない。また、墓域の東限及び南限は確認できていない。北限及び西限は限定が可能であり、谷に沿った方向に微高地上に広がることが推定できる。図25の様に東方向と南方向には、墓域はさらに広がる可能性を推定する。図25の南東角にみえる、府営牧野東住宅建て替え工事に伴う第1次調査地内においても、招提中町遺跡内で北東方向から南西方向にのびる範囲で弥生時代の方形周溝墓を約43基検出している（註3）。こちらも、墓域の南限は、本調査地内においての墓域を限定している谷と同様の谷によって限定されるように見える。

この2つの方形周溝墓群は、ともに弥生時代中期のほぼ同時期に形成された。招提中町遺跡の43基では、わずかに畿内I様式末もしくはIII様式に属する土器も出土したが、大半の墓からは畿内II様式の弥生土器が出土した。本調査での出土土器は量も少なく摩滅も著しいが、それでも口縁部及び頸部の形状や櫛描き文から畿内II～III様式に属するということまでは限定でき



図25 調査地周辺地形復原図

る。また、招提中町遺跡では、方形周溝墓が単独で築造されたものと、列をなす周溝墓群が周溝を共有して築造されたものとの2タイプが存在するが、九頭神遺跡の本調査では、3基とも周溝などが重複することなく、各々単独で築造されていた。また、招提中町遺跡では単独のものの方が時期が比較的新しいとされている。このことは、本調査で検出した周溝墓にはI様式末に属するものではなく、II～III様式を推定しているもののみであることと矛盾しない年代である。各々の周溝墓の規模についても、本調査地内の3基は溝の幅などから招提中町遺跡では比較的大規模にあたる単独のものと同等であろう。

加えて、本調査の方形周溝墓1と招提中町遺跡の12号方形周溝墓の2基において共通して、周辺他遺跡の方形周溝墓群ではあまりみられない周溝内埋葬の痕跡を確認した。どちらも幅0.8mほどの土坑状を呈する。前者は長さ約1.8mで梢円に近く、後者は長さ約1.3mのやや角ぼった隅丸長方形に近い平面形状をもつ。中からは副葬品や供獻土器の類いはみつかっておらず、木棺などの痕跡も確認できなかったが、周溝の完掘後に底面で検出したものであり、方形周溝墓本体と時期差はないものと考える。

招提中町12号墓は、9.0m×7.5mの長方形の墳丘をもち、周溝内埋葬の可能性をもつ土坑は短片の隅近くで検出した。コの字形にめぐらす周溝と1号墓の南東集溝を残る北側の一辺に利用して方形に区画し、その1号墓との間には2ヶ所の陸橋部を掘り残す。南東周溝は13号墓と南西周溝は14号墓と共有する。九頭神遺跡の方形周溝墓1の墳丘規模は、東西では約8.5mであるが、南北では攤乱により確認できない。残存しているのは約6～7mで、周溝内埋葬の痕跡は残存長約7mの西側周溝の南端に位置する。こちらも長方形の墳丘をもっていたとすれば短邊にあることになる。ほぼ正方形に近い墳丘を復原したとしても、南隅近くであることかわりはない。

このように数多くの際立った特徴を共有し、ほぼ同時期に形成された墓域でありながらも、第1次調査地内においては墓域の北西限を確認しており、2群は同一の墓域としてつながるのではなく、両者間に居住域などを挟んだ別途の墓域である。ただ、特徴や墓域の稼働時期などの類似から造墓集団は共通していた可能性が極めて高いといえよう。

この他にも枚方市域では、楠葉野田西遺跡でII様式の方形周溝墓が9基、アゼクラ遺跡ではIII様式に属するものが2基、天野川右岸の星丘西遺跡ではIII～IV様式のものが13基、天野川上流域左岸の茄子作遺跡ではV様式のものが1基みつかっている（註4）。中でも、穂谷川を挟んで九頭神遺跡・招提中町遺跡の向かい、南側に位置する交北城ノ山遺跡では多くの特徴を共有する人規模な方形周溝墓群が形成される。

枚方台地の北縁に位置するこの遺跡は、旧石器時代から中世にわたる複合遺跡であるが、弥生時代集落の消長は招提中町遺跡と呼応する（註5）。42基検出された方形周溝墓はすべて弥生時代中期前半に属し、それ以降のものはない。42基中には、一辺が10mを超える大型のもの、7～8mほどの中型のもの、5m前後の小型のものの3群に大別される。これらのほとんどは、

互いに数基ずつ溝を共有して群をなして築造されており、単独で築かれたものはわずかであった。このような墓域内における周溝墓の築造時期と分布状況は、招提中町遺跡例と極めて類似する。九頭神遺跡では単独で築かれたようにみえる方形周溝墓のみを検出したが、完存するものではなく検出数も少なかったため、同遺跡の墓域内においても、同様に群をなして築かれた中・小規模のものが存在した可能性は高い。周溝墓1は残存状況及び墳丘規模からしても単独で築かれた大型のものである可能性が高いが、他の2基については規模の推定が可能な残存状況ではないため、削平されていた溝を他の中・小型周溝墓と共有していた可能性もある。

そしてその後、弥生時代後期には当該調査地周辺での集落・墓域遺構はみられなくなり、穂谷川流域では上流の田口山遺跡周辺へ移動することは以前から指摘される。招提中町遺跡のその後の調査では庄内期に属する竪穴式住居を検出しているが、それまでの弥生時代後期に属する遺構は今回を含めた近年の調査でもみつかっておらず（註6）、弥生時代後期における当該地域の空白期間が立証されるのかどうか、さらなる調査成果が今後も期待される。

（小川）

（註1）財団法人枚方市文化財研究調査会『九頭神遺跡』Ⅱ 2004年3月

財団法人枚方市文化財研究調査会『九頭神庵寺』2007年3月

枚方市教育委員会『九頭神遺跡』—九頭神庵寺— 1997年

（註2）財団法人枚方市文化財研究調査会による発掘調査中に幾度か見学をさせていただいた。

（註3）本章における招提中町遺跡の方形周溝墓に関する記述は、大阪府教育委員会の報告（2001「招提中町遺跡」大阪府埋蔵文化財調査報告2001-1）による。

（註4）西田敏秀・荒木幸治「淀川左岸地域における弥生集落の動向」「みずほ」第32号 45-57頁 2000年による集成を参照した。その後、北河内では寝屋川市域などにおいて国道1号線バイパス・第二京阪道路建設に伴う調査によって、新しく方形周溝墓がみつかっているが、枚方市域においては前掲の集成時から大きな変化はない。

（註5）本章における文北城ノ山遺跡に関する記述は、財団法人枚方市文化財研究調査会『枚方市文化財報』Ⅲ 1982年、及び枚方市教育委員会『枚方の遺跡と文化財』1985年による。

（註6）大阪府教育委員会『招提中町遺跡』Ⅱ 大阪府埋蔵文化財調査報告2004-1 2005年3月

同『大阪府教育委員会文化財調査事務所年報』11 2007年11月

## 付論 九頭神遺跡土壌サンプルの花粉・珪藻分析について —九頭遺跡の花粉化石—

鈴木 茂（パレオ・ラボ）

### 1. はじめに

九頭神遺跡の発掘調査の際、トレンチ断面より土壌試料が採取された。以下にこの土壌試料について行った花粉分析結果を示す。なお、同試料を用いて珪藻分析も行われている。

### 2. 試料と分析方法

試料は③下層試料とその上位の④試料の2試料である。試料について、③下層および④試料ともに褐色のレキ混じり砂質シルトである。花粉分析はこれら2試料について以下の手順にしたがって行った。

試料（湿重約10g）を遠沈管にとり、10%の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に、46%のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗青、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸1：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。検鏡はこの残渣より適宜プレパラートを作成して行い、その際サフラニンに染色を施した。

### 3. 分析結果

検出された花粉・胞子の分類群数は、樹木花粉8、草本花粉5、形態分類で示したシダ植物胞子2の総計15である。これら花粉の一覧を表1に示したが、えられた花粉化石数が非常に少なかったことから分布図としては示すことができなかった。なお表においてハイフンで結んだ分類群はそれら分類間の区別が困難なものを示しており、マメ科には樹木起源草本起源のものがあるが各々に分けることが困難なため便宜的に草本花粉に一括して入れてある。

観察の結果、得られた分類群は、樹木類ではマツ属複繊維管束帯属（アカマツやクロマツなどのいわゆるニヨウマツ類）、マツ属（不明）、スギ、イチイ科—イヌガヤ科—ヒノキ科（以後ヒノキ類と略す）、コナラ属コナラ亜属、トチノキ属ツタ属、イボタノキ属、草本類ではイネ科、マメ科、セリ科、ヨモギ属、他のキク亜科およびシダ植物單条型と三條型の計15分類群であった。これらのうち③下層試料科ではツタ属とマメ科が、④試料ではスギがやや目立って観察された。

### 4. 分析結果について

上記したように得られた花粉化石数は分類群数とともに非常に少ない結果となった。同試料を用いて珪藻分析も行われているが、こちらも珪藻化石は少なく、堆積物は水成堆積ではないこと

が推察されている。一般に陸域に落下した花粉は紫外線や土壤バクテリアなどによって容易に分解され消失してしまう。一方溝や池、海などの水域に落下した花粉は上記紫外線や土壤バクテリアから保護され、良好な状態で保存される。今回の分析試料は珪藻分析から水のついた環境ではないことが推察されており、花粉の多くは分解消失している可能性が高いと思われる。そのなか、③下層試料においてはつる植物のツタ属やマメ科の産出が特徴的である。

表3 産出花粉化石一覧

和名	学名	③下	④
樹木			
マツ属複数箇所見出	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	1	—
マツ属(不明)	<i>Pinus</i> (Unknown)	1	—
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> D. Don	—	4
イチイ科 - イヌガヤ科-ヒノキ科	T. - C.	2	1
コナラ属コナラ亞属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Leptobalanus</i>	1	—
トチノキ属	<i>Ascarulus</i>	1	—
ツタ属	<i>Parthenocissus</i>	5	—
イボタノキ属	<i>Ligustrum</i>	2	—
草本			
イネ科	<i>Gramineae</i>	2	—
マメ科	<i>Leguminosae</i>	13	—
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	2	—
ヨモギ属	<i>Arenaria</i>	—	1
他のギク科	other <i>Tubuliflorae</i>	3	—
シダ植物			
單胞型孢子	Monocolpate spore	2	—
三條型孢子	Trilete spore	1	—
樹木花粉	Arboreal pollen	13	5
草木花粉	Nonarboreal pollen	20	1
シダ植物孢子	Spores	3	0
花粉・孢子総数	Total pollen & Spores	36	6
不明花粉	Unknown pollen	6	4

\* T. - C.はTaxaceae-Cephalotaxaceae-Cupressaceaeを示す

# 図 版





第Ⅰ調査区第2遺構面全景（南から）

第Ⅰ調査区全景第2遺構面全景（西から）





第Ⅰ調査区第1面 遺構（南から）



第Ⅰ調査区全景第2面 遺構  
溝群（西から）



第Ⅰ調査区全景第2面 遺構  
井戸と区画溝（南東から）



第Ⅰ調査区全景第2面 遺構  
井戸 半裁状況（南東から）





方形周溝墓 1 全景



方形周溝墓 1  
周溝內土器出土狀況



方形周溝墓 1 周溝斷面



方形周溝墓 1 周溝內埋葬





第Ⅰ調査区第2面 方形周溝墓2  
(南から)



方形周溝墓2 周溝断面  
(南東から)



第Ⅰ調査区第2面 方形周溝墓3  
(東から)



方形周溝墓3 周溝東西断面  
(南から)



第II調査区 第2遺構面中央部（東から）

第II調査区 第2遺構面北端（南東から）





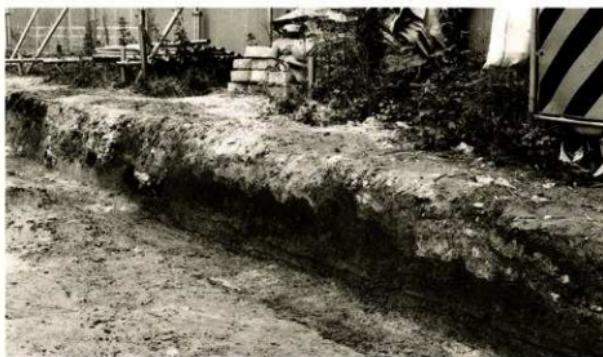
第II調査区 第3遺構面南半（東から）

第II調査区 第3遺構面北半（東から）





第Ⅰ調査区東壁断面  
(西から)





第Ⅱ調査区北壁断面  
(南から)





第Ⅱ調査区南壁断面  
(北から)





第Ⅱ調査区確認トレンチ  
谷肩確認（北西から）



第Ⅱ調査区確認トレンチ  
谷確認（北東から）



第Ⅱ調査区 第3造構面  
L字区画溝 断面







# 報告書抄録

ふりがな	くずがみいせき					
書名	九頭神遺跡					
副書名	府営枚方牧野東住宅建替第5期工事に伴う調査					
巻次						
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	2009-4					
編著者名	小川裕見子・前田俊雄・野島智実・大向智子・堂ノ木智子・山田昌恵					
編集機関	大阪府教育委員会 文化財保護課					
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL.06-6941-0351					
発行年月日	2010年3月31日					
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積 調査原因
くずがみ 九頭神	ひらかたしひがしまきのちょう 枚方市東牧野町	27210	28°34'50"15"	135°40'30"15'	2007年7月2日 2008年2月26日	3500m <sup>2</sup> 府営枚方牧野東住宅建替事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
九頭神	集落・ 方形周溝墓	弥生時代	方形周溝墓・楕円倒木	上器	調査区南東部の 標高地上に、弥生時代中期の方形周溝墓群。
		古代	溝、ピット、谷	土師器、須恵器、 黒色土器、瓦	調査区中央部が ら西部に古墳時代～ 古代に埋没した谷。
		中世	溝、ピット	土師器、須恵器、陶磁器、 瓦器	古代～中・近世に かけて耕作痕跡の 溝、区画溝、川戸、插立柱跡物。
		近世	溝、ピット	陶磁器、他	
要旨	古代～中・近世にかけて、耕作地及び居住地として利用されていた。耕作地は、区画溝と井戸がある。調査区西部は、古代までは櫛谷川へ削り下る谷間が存在した可能性が高い。調査区南東部の標高地では、弥生時代中期の方形周溝墓を3基検出した。擾乱を受けているが、墓域はさらに南東に広がった可能性が高い。				

## 大阪府埋蔵文化財調査報告2009-4

### 九頭神遺跡

府営枚方牧野東住宅建替第5期工事に伴う調査

発行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前2丁目

TEL06-6941-0351 (代表)

発行日 平成22年3月31日

印刷 株式会社中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号

# Kuzugami Site

March, 2010

Osaka Prefectural Board of Education